NPOREF 創立 40 周年記念海外研修

英国都市調査団報告

２０１９年１２月

特定非営利活動法人
福井地域環境研究会

NPOREF ２０１９年度

創立４０周年記念　海外研修

英国都市調査団報告

目　　次

１．研修旅行を終えて
団長　宮本　好昭 …… １

２．団員名簿
…… ２

３．行動記録
…… ３

４．英国（イングランド）研修報告書
㈱デルタコンサルタント　西谷　光史 ……１３

５．英国の水辺・歩道橋と商業開発
名古屋産業大学名誉教授　加藤　哲男 ……１９

６．英国の地方都市を訪ねて
神戸市立工業高等専門学校　小塚みすず ……２９

７．リバプールのバスはしゃべらない！
福井高校　三輪　裕一 ……３９

８．初めてのＵＫ４都市めぐり
三輪加奈枝 ……４１

９．英国の橋梁事情
㈱デルタコンサルタント　宮本　好昭 ……４８

10．三びきのこぶた
㈱デルタコンサルタント　谷口さとみ ……５１

編集後記　加藤　哲男 ……５２

１．研修旅行を終えて

団長　宮本　好昭

EU 離脱でゆれるイギリスへ､福井地域研究会(REF)創立 40 周年記念事業の海外研修で訪れた。

9 月 23 日、中部・関西国際空港から、フランクフルト国際空港を経て、イングランド北部の産業都市、マンチェスター、港湾都市でありビートルズの故郷でもあるリバプール、さらに首都ロンドンへと各都市内と郊外、周辺都市を視察した。

イギリスは、産業革命発祥の地であり、世界で最初に近代化をなし遂げた国である。なによりも、青春時代に大きな衝撃と憧れを与えてくれ、半世紀を過ぎた今もなお、趣味としているビートルズの生誕の地であることが、研修地にイギリスを選んだ理由である。

イギリスと世界の人的交流が 1960 年代に飛行機が主となる以前は、船舶による交流が主流であった。リバプールは、西アフリカからアメリカ南部への奴隷貿易の中継点であった。また、アメリカ南部からの綿花を輸入し、マージー川を遡ってマンチェスターの紡績工場でつくられた綿製品はここから、世界各地へ輸出されて行った。アメリカ南部で、ミシシッピー川流域の黒人奴隷たちの過酷な日常から生まれたリズム・アンド・ブルースと山岳部に移民してきたアイリッシュが紡いできたカントリー・ミュージックが融合して生まれたロックンロール(Rock & Roll)は、こうした交易によって港町リバプールにもたらされた。

ビートルズのメンバー4 人は 1940 年代後半にここリバプールで生まれている。彼らのルーツはアイリッシュ、スコットランド系である。リバプールの歴史と彼らのアイリッシュ性が、独特のロックンロール、マージービート(Mersey Beat、日本ではリバプールサウンド)を生み出した。

今回の研修では、われわれ視察メンバーは、彼らより 3 人多い 7 名だが、IRE 海外研修の伝統にのっとり、各自、自由に調査都市を歩き回り（Working like a dog♪)、ホテルに帰ってはよく眠った(Sleeping like a log♪)。

6 泊 8 日のあわただしい研修旅行（Hard Day's Night♪）であったが、事故もなく全員無事帰国できた。各団員の皆様に深く感謝する次第である。

(写真)リバプールからチェスターへ向かう列車の中で

２．NPOREF 英国都市調査団　団員名簿

団　長　宮本　好昭　NPOREF 副理事長・㈱デルタコンサルタント

副団長　加藤　哲男　NPOREF 理事長・㈱キミコン

団　員　小塚みすず　神戸市立工業高等専門学校

団　員　三輪　裕一　福井高校

団　員　三輪香奈枝

団　員　谷口さとみ　㈱デルタコンサルタント

幹　事　西谷　光史　㈱デルタコンサルタント

（敬称略・役職は研修会参加時）

Mercure Manchester Piccadilly Hotel 外観

３．行動記録

月日	時刻	宮本・谷口	西谷	三輪夫妻	加藤	小塚
9月23日 （月）	10:30	中部国際空港発 LH737			関西国際空港発(10:45)AY078	
	15:50	ﾌﾗﾝｸﾌﾙﾄ国際空港着　乗換 LH946(17:10 発)			ﾍﾙｼﾝｷ空港乗換(16:05)AY1365	
	17:30	ﾏﾝﾁｪｽﾀｰ空港着、チャーターワゴン車でホテルへ				
	19:30	ﾒﾙｷｭｰﾙ･ﾏﾝﾁｪｽﾀｰ･ﾋﾟｶﾃﾞﾘｰ･ﾎﾃﾙ ﾁｪｯｸｲﾝ　夕食「ホテルレストラン；Level３」				
9月24日 （火）		(9:00)ﾎﾃﾙ発、ﾋﾟｯｶﾃﾞﾘｰ･ｶﾞｰﾃﾞﾝｽﾞ、大聖堂、科学産業博物館、ｼﾞｮﾝﾗｲﾗﾝｽﾞ図書館	(8:50)ﾎﾃﾙ発、市庁舎、科学産業博物館、ｼﾞｮﾝﾗｲﾗﾝｽﾞ図書館、M.P.駅以南ﾘﾝｸ･ﾞﾛｰﾄﾞ徘徊	(9:39)ﾎﾃﾙ発 ﾏﾝﾁｪｽﾀｰﾕﾅｲﾃｯﾄﾞ･ｻｯｶｰｽﾀｼﾞｱﾑ、ﾅｼｮﾅﾙ･ﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ博物館、ｼﾞｮﾝﾗｲﾗﾝｽﾞ図書館	(8:15)ﾎﾃﾙ発、ﾒﾃﾞｨｱ･ｼﾃｨｰ地区、ｼﾞｮﾝﾗｲﾗﾝｽﾞ図書館、ﾄﾘﾆﾃｨ歩道橋、帝国戦争博物館	(8:15)ﾎﾃﾙ発 (10:45)ﾖｰｸ市 (15:15)ﾘｰｽﾞ市 (17:53)ﾋﾞｸﾄﾘｱ駅から散策
	18:00	自室	夕食「中華街；中国城」			夕食
9月25日 （水）	8:00	ホテルチェックアウト後徒歩でﾏﾝﾁｪｽﾀｰ･ﾋﾟｶﾃﾞﾘｰ駅へ				
	8:48	快速鉄道でﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ﾗｲﾑｽﾄﾘｰﾄ駅へ（9:28 着）ホテルチェックイン(9:35)				
	10:36	快速鉄道で Chester 駅へ（11:24 着）				
		ｼｭｰﾙｽﾞﾍﾞﾘｰ駅を経てバスで世界遺産ｱｲｱﾝ･ﾌﾞﾘｯｼﾞへ	チェスター旧市街地視察、大聖堂、ザ・クロス、城壁、ディー河畔 (12:50)昼食「サンドイッチ店；The York Roast Co.」 (13:40)休憩「地ビール店；Tap」（15:45)ﾏｰｼｰ鉄道でﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ﾗｲﾑｽﾄﾘｰﾄ駅へ			
	18:00	夕食「Bold St.； Crafty Chandler」				
9月26日 （木）		(9:30)ﾎﾃﾙ発、ﾋﾞｰﾄﾙｽﾞ･ﾏｼﾞｶﾙﾐｽﾃﾘｰﾂｱｰ(専用車)、ﾍﾟﾆｰ･ﾚｰﾝ、ｽﾄﾛﾍﾞﾘｰ･ﾌｨｰﾙﾄﾞ、ﾏｼｭｰ･ｽﾄﾘｰﾄ、ｷｬﾊﾞｰﾝ･ｸﾗﾌﾞ、ｱﾙﾊﾞｰﾄ･ﾄﾞｯｸ、ﾏｰｼﾞｻｲﾄﾞ海洋博物館、ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ博物館、ﾍﾟﾃﾞｽﾄﾘｱﾝ･ｿﾞｰﾝ回遊		(10:40)ﾎﾃﾙ発、ﾊﾞｽｾﾝﾀｰ、ｱﾝﾌｨｰﾙﾄﾞ･ｻﾝｶｰｽﾀｼﾞｱﾑ、ｽﾀｼﾞｱﾑﾂｱｰ、ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ大聖堂	(9:30)ﾎﾃﾙ発、ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ大聖堂、ﾊﾟﾗﾀﾞｲｽ･ｽﾄﾘｰﾄ歩道橋、ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ﾜﾝ SC，昼食「ﾎﾟﾝﾌﾟﾊｳｽ」、ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ博物館、ﾃｰﾄ･ｷﾞｬﾗﾘｰ ﾋﾞｰﾄﾙｽﾞ･ｽﾄｰﾘｰ市街地徒歩散策	ｾﾝﾄﾗﾙ駅周辺ｼｮｯﾋﾟﾝｸﾞ･ｱｰｹｲﾄﾞ
	18:00	自室	夕食「Renshaw St. 中華料理；四季」			
9月27日 （金）	8:20	ホテルチェックアウト後徒歩でﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ﾗｲﾑｽﾄﾘｰﾄ駅へ				
	8:47	ﾊﾞｰｼﾞﾝﾄﾚｲﾝでﾛﾝﾄﾞﾝ･ｳｰｽﾄﾝ行きに乗車したが途中で車両故障によりｽﾀｯﾌｫｰﾄﾞ駅で後続車に乗換				
	11:59	ﾛﾝﾄﾞﾝ･ｳｰｽﾄﾝ駅着、徒歩でホテルへ　(12:50)ホテル・プレジデント・チェックイン				
		(13:40)ﾎﾃﾙ発、ｱﾋﾞｰ･ﾛｰﾄﾞ、ﾍﾞｰｶｰ街、ﾊﾞｯｷﾝｶﾞﾑ宮殿、		(14:45～17:05) 大英博物館	(15:19～16:29) ﾚｯﾁﾜｰｽ視察 (16:47～17:17) ｳｴﾙｳｨﾝ視察	ｱﾋﾞｰ･ﾛｰﾄﾞ、 (15:51～17:17) ﾚｯﾁﾜｰｽ視察 (18:30～19:22) ｳｴﾙｳｲﾝ視察
		ﾀﾜｰ･ﾌﾞﾘｯｼﾞ、ﾐﾚﾆｱﾑ･ﾌﾞﾘｯｼﾞ.	ｵｯｸｽﾌｫｰﾄﾞ通、ﾎﾞﾝﾄﾞ通.エロスの像			
	18:30	夕食 Carluccio's	夕食「Pub Bar Night & Day」			
9月28日 （土）		(8:30)ﾎﾃﾙ発、ﾌﾞﾘｽﾄﾙ･ﾃﾝﾌﾟﾙ･ﾐｰｽﾞ駅、ｸﾘﾌﾄﾝ吊り橋ﾊﾞｰｽ･ｽﾊﾟ駅、ﾊﾞﾙﾄﾆｰｱｰﾁ橋	(7:00)ﾎﾃﾙ発、(9:20～10:20) ﾚｯﾁﾜｰｽ視察、(13:25～14:05)ﾊﾞｰｽ視察、大英博物館	(10:25)ﾎﾃﾙ発、ﾃﾞﾊﾟｰﾄ･ﾘﾊﾞﾃｨ、ｳｴｽﾄﾐﾝｽﾀｰ寺院、国会議事堂、ﾀﾜｰﾌﾞﾘｯｼﾞﾛﾝﾄﾞﾝ塔	(7:00)ﾎﾃﾙ発、ﾌﾞﾘｽﾄﾙ市視察、ｾﾝﾄﾎﾟｰﾙ大聖堂、ﾐﾚﾆｱﾑ･ﾌﾞﾘｯｼﾞ、ｺｳﾞｪﾝﾄ･ｶﾞｰﾃﾞﾝ、大英博物館	(7:30)ﾎﾃﾙ発、(9:59～12:19) ﾊﾞｰｽ視察、大英博物館、ﾄﾗﾌｧﾙｶﾞｰ広場、ｳｴｽﾄﾐﾝｽﾀｰ橋
	18:30	夕食「バーガーショップ；Byron」				
9月29日 （日）	6:45	チェックアウト後ホテル発、チャーターワゴン車でヒースロー国際空港へ（7:30 着）				
	9:30	ヒースロー国際空港発　LH901			ヒースロー空港発 AY1332	
	14:00	フランクフルト国際空港着（12:20）　乗換 LH946			ﾍﾙｼﾝｷ乗換 AY77	
9月30日	9:30	中部国際空港着			関西国際空港着(8:55)	

ＮＰＯＲＥＦ海外研修 2019 加藤哲男行動記録

月日	着時刻	場所	発時刻	移動手段
9 月 23 日		自宅	4:40	自家用車
（月）	4:55	三輪氏宅	5 :00	自家用車
	7:23	中部国際空港	10:30	LH737 便
	15:50	フランクフルト空港	17:10	LH946 便
	17:30	マンチェスター空港	18:30	チャーター車
	19:30	Mercure Manchester Piccadilly チェックイン		
	20:00	夕食「ホテルレストラン；Level3」		
24 日（火）		ホテル発	8:15	徒歩
	8:30	ピカデリー駅・トラムホーム	8:40	メトロ・リンク
	8:50	Broadway 電停	8:50	徒歩
	8:55	Media City 地区視察、ミレニアム可動歩道橋		
		Harbour City 電停	9:40	メトロ・リンク
	9:50	Deansgate-Castlefield 電停	9:50	徒歩
	10:05	マンチェスター科学産業博物館	10:25	
	10:38	ジョン・ライランズ図書館	11:20	
	11:30	トリニティ歩道橋	11:35	
	11:46	Victoria 電停	11:48	メトロ・リンク
	11:56	St.Peter's Square 電停	11:57	徒歩
		市庁舎視察・コンビニ買物		
	12:30	Deansgate-Castlefield 電停	12:30	メトロ・リンク
	12:45	Piccadilly-Garden 電停(ホテル自室で昼食)	13:25	メトロ・リンク
	13:43	MEDIACITYUK 電停	13:43	
	14:00	Media City Footbridge、帝国戦争博物館	15:00	
		MEDIACITYUK 電停	15:45	メトロ・リンク
	16:15	Piccadilly-Garden 電停		
	18:00	夕食「中華街；中国城」		
25 日（水）		チェックアウト後ホテル発	8:00	徒歩
	8:15	Manchester Piccadilly 駅	8:48	鉄道
	9:28	Liverpool Lime Street 駅	9:30	徒歩
	9:35	Holiday inn Liverpool チェックイン	10:20	徒歩
	10:25	Liverpool Lime Street 駅	10:36	鉄道
	11:24	Chester 駅	11:30	徒歩
		チェスター旧市街地視察		
	12:50	昼食「サンドイッチ店；The York Roast Co.」	13:20	
	13:40	休憩「地ビール店；Tap」	14:00	
	15:00	チェスター・バス・ターミナル	15:20	路線バス
	15:35	Chester 駅	15:45	鉄道 Mersey rail
	16:30	Liverpool Lime Street 駅	16:35	徒歩
	16:45	ホテル着		
	18:00	夕食「Bold St.；Crafty Chandler」		

月日	着時刻	場所	発時刻	移動手段
26 日（木）		ホテル発	9:30	徒歩
	10:00	リバプール大聖堂	11:10	
	11:30	パラダイス・ストリート歩道橋	11:35	
	11:40	リバプール・ワンショッピングセンター	11:55	
	12:00	昼食「THE　PUMPHOUSE」	12:50	
	13:00	リバプール博物館	13:50	
	13:55	Tate Riverpool	14:20	
	14:30	ビートルズ・ストーリー	16:20	
	16:45	ホテル着		
	18:00	夕食「中華料理；四季」		
27 日（金）		チェックアウト後ホテル発	8:20	
	8:30	Liverpool Lime Street 駅	8:47	鉄道 Virgin Train
	10:30	Stafford 駅（鉄道故障乗換）	10:41	
	11:59	London Euston 駅	12:15	
	12:50	ホテル・プレジデント・チェックイン	13:40	
	13:45	Kings Cross 駅	14:21	地下鉄
	15:19	Letchwerth-Gardencity 駅（1hr10min 視察滞在）	16:29	鉄道
	16:47	Welwyn-Gardencity 駅（30min 視察滞在）	17:17	鉄道
	17:50	Kings Cross 駅	17:55	鉄道
	18:05	Russel Square 地下鉄駅	18:15	地下鉄
	18:20	ホテル着		
	18:30	夕食「Pub Bar Night & Day」		
28 日（土）		ホテル発	7:00	徒歩
	7:05	Russel Square 地下鉄駅	7:12	地下鉄
	7:51	London Paddington 駅	8:00	鉄道 Great Western
	9:41	Bristol Temple Meads 駅（1hr49min 視察滞在）	11:30	鉄道 Great Western
	13:14	London Paddington 駅	13:30	地下鉄
	13:55	St.Paul's 地下鉄駅	14:00	徒歩
	14:05	セントポール大聖堂、ミレニアム・ブリッジ	14:25	
	14:35	タワーブリッジ・ロンドン塔	14:50	
	14:55	Tower Hill 地下鉄駅	15:00	地下鉄
	15:10	Westminster 地下鉄駅	15:15	徒歩
		トラファルガー広場、コペント・ガーデン		
	16:20	大英博物館	17:30	
	18:00	ホテル着		
	18:30	夕食「バーガーショップ；Byron」		
29 日（日）		チェックアウト後ホテル発	6:45	チャーター車
	7:30	ヒースロー空港	9:30	LH901 便
	12:20	フランクフルト空港	14:00	LH736 便
30 日（月）	9:30	中部国際空港	10:32	自家用車
	12:45	三輪氏宅	12:45	
	13:00	自宅		

ＮＰＯＲＥＦ海外研修 2019 小塚みすず行動記録

月日	着時刻	場所	発時刻	移動手段
9 月 23 日（月）	8:15 14:17 17:00 19:30 20:00	関西国際空港 ヘルシンキ空港 マンチェスター空港 Mercure Manchester Piccadilly チェックイン 夕食「ホテルレストラン；Level3」	10:45 16:05 18:30	AY078 便 AY1365 便 チャーター車
24 日（火）		ホテル発	8:15	徒歩
	8:35	ピカデリー駅	8:45	鉄道
	10:14	ヨーク駅		徒歩
		城壁、ミクルゲート・バー、レンダルブリッジ、ヨーク・ミンスター、ストーンゲート、シャンブルズ、国立鉄道博物館		
		昼食：イングリッシュティー&ベリースコーンのセット@国立鉄道博物館展示ホール内		
	14:20	ヨーク駅	14:26	鉄道
	15:15	リーズ駅		徒歩
		市庁舎、リーズ・シティ博物館、シティ・バス&コーチステーション、ブリゲイド、リーズ・ショッピングプラザ、カークゲート・マーケット、ソートン・アーケード、クィーンズ・アーケード、カウンティ・アーケード、ヴィクトリア・クォーター、コーン・エクスチェンジ		
	17:00	リーズ駅	17:06	鉄道
	17:53	ビクトリア駅		徒歩
		ビクトリア駅から宿泊先までを散策		
		夕食（ベリー・レモネード、パスタ、サラダ等）		
	21:30	ホテル着		
25 日（水）		チェックアウト後ホテル発　※メンバーに同行	8:00	徒歩
	8:15	Manchester Piccadilly 駅	8:48	鉄道
	9:28	Liverpool Lime Street 駅	9:30	徒歩
	9:35	Holiday inn Liverpool チェックイン	10:20	徒歩
	10:25	Liverpool Lime Street 駅	10:36	鉄道
	11:24	Chester 駅	11:30	徒歩
		チェスター旧市街地視察		
	12:50	昼食「サンドイッチ店；The York Roast Co.」	13:20	
	13:40	休憩「地ビール店；Tap」	14:00	
	15:00	チェスター・バス・ターミナル	15:20	路線バス
	15:35	Chester 駅	15:45	鉄道 Mersey rail
	16:30	Liverpool Lime Street 駅	16:35	徒歩
	16:45	ホテル着		
	18:00	夕食「Bold St.；beer、フィッシュ＆チップス他」		

月日	着時刻	場所	発時刻	移動手段
26 日（木）		ホテル発	9:30	徒歩
	10:00	リバプール大聖堂	11:10	
	11:30	パラダイス・ストリート歩道橋	11:35	
	11:40	リバプール・ワンショッピングセンター	11:55	
	12:00	昼食「THE　PUMPHOUSE」	12:50	
	13:00	リバプール博物館	13:50	
	13:55	Tate Riverpool　※ここまで加藤先生に同行	15:20	
		ビートルズ・ストーリー、マージー・フェリーズ、マシュー・ストリート、セントラル駅周辺のショッピングアーケード		
	17:30	ホテル着		
	18:00	夕食「中華料理；四季」		
27 日（金）		チェックアウト後ホテル発	8:20	
	8:30	Liverpool Lime Street 駅	8:47	鉄道 Virgin Train
	10:30	Stafford 駅（鉄道故障乗換）	10:41	
	11:59	London Euston 駅	12:15	
	12:50	ホテル・プレジデント・チェックイン	13:40	
		Euston 駅→St.John's Wood 駅		地下鉄
		アビー・ロード		徒歩
		St.John's Wood 駅→Kings Cross 駅		地下鉄
	15:15	Kings Cross 駅→Letchwerth-Gardencity 駅	15:51	鉄道
	16:48	レッチワース・ガーデン・シティ・ヘリテージ財団、レッチワース図書館、ハワードパーク	17:17	
		Welwyn-Gardencity 駅	18:05	鉄道
	18:30	散策	19:22	
	21:15	Kings Cross 駅→Russel Square 駅		地下鉄
	22:15	ホテル着		
28 日（土）		ホテル発	7:30	徒歩
	8:10	Kings Cross 駅→London Paddington 駅	8:30	地下鉄
	9:59	Bath spa 駅		鉄道 Great Western
		アビー・チャーチ・ヤード、バース建築博物館、ザ・サーカス、ロイヤル・クレッセント	12:19	鉄道 Great Western
	13:00	London Paddington 駅→Russel Square 駅	14:00	地下鉄
		ロンドン市内散策：大英博物館、トラファルガー広場、コペント・ガーデン、ホース・ガーズ、ウェストミンスター・ブリッジ		徒歩
		Waterloo 駅→Russel Square 駅	17:00	地下鉄
	17:25	ホテル着	17:30	徒歩
	18:30	夕食「バーガーショップ；Byron」		
29 日（日）		チェックアウト後ホテル発	6:45	チャーター車
	7:30	ヒースロー空港	10:20	AY1332 便
	15:15	ヘルシンキ空港	17:20	AY77 便
30 日（月）	08:55	関西国際空港		自家用車

ＮＰＯＲＥＦ海外研修 2019　西谷光史行動記録

月日	着時刻	場所	発時刻	移動手段
9 月 23 日	8:00	中部国際空港	10:30	LH737 便
（月）	15:50	フランクフルト空港	17:10	LH946 便
	17:30	マンチェスター空港	18:30	チャーター車
	19:30	Mercure Manchester Piccadilly チェックイン		
	20:00	夕食「ホテルレストラン；Level3」		
24 日		ホテル発	8:50	終日徒歩にて移動
（火）	9:20	Victria 駅		
	9:50	マンチェスター市庁舎		
	10:10	リバー・アーウェル周辺散策(リバーサイド)		
	10:38	マンチェスター科学産業博物館(5 分以内退場)		
	10:55	ジョン・ライランズ図書館		
	13:00	SM・SM 周辺ペデストリアンゾーン散策		
	14:40	Castle field 地区周辺散策		
	14:50	カフェで休憩		
	16:05	Manchester Piccadilly 駅		
		Manchester Piccadilly 駅以南の Ring Road 徘徊		
	16:55	Trinity Bridge		
	17:30	ホテル着		
	18:00	夕食「中華街；中国城」		
25 日	:	チェックアウト後ホテル発	8:00	徒歩
（水）	8:15	Manchester Piccadilly 駅	8:48	鉄道
	9:28	Liverpool Lime Street 駅	9:30	徒歩
	9:35	Holiday inn Liverpool チェックイン	10:20	徒歩
	10:25	Liverpool Lime Street 駅	10:36	鉄道
	11:24	Chester 駅	11:30	徒歩
		チェスター旧市街地視察		
	12:50	昼食「サンドイッチ店；The York Roast Co.」	13:20	
	13:40	休憩「地ビール店；Tap」	14:00	
	15:00	チェスター・バス・ターミナル	15:20	路線バス
	15:35	Chester 駅	15:45	鉄道 Mersey rail
	16:30	Liverpool Lime Street 駅	16:35	徒歩
	16:45	ホテル着		
	18:00	夕食「Bold St.；Crafty Chandler」		
26 日		ホテル発	9:30	徒歩
（木）	10:00	ビートルズ・バスツアー	11:10	
	12:30	カフェで一服	11:35	
	13:30	Albert Dock・Merseyside Maritime Museum	11:55	
	15:20	リバプール博物館	12:50	
	16:00	ペデストリアンゾーン散策	13:50	
	18:00	夕食「中華料理；四季」	14:20	

月日	着時刻	場所	発時刻	移動手段
27 日		チェックアウト後ホテル発	8:20	
（金）	8:30	Liverpool Lime Street 駅	8:47	鉄道 Virgin Train
	10:30	Stafford 駅（鉄道故障乗換）	10:41	
	11:59	London Euston 駅	12:15	
	12:50	ホテル・プレジデント・チェックイン	13:40	
	14:20	St Johns Wood 駅		
	14:25	アビーロード	Nodeta	
	14:55	Baker Street 駅（Baker street ぶらり）		
	15:20	Green park 駅		
		Green Park・バッキンガム宮殿		
	16:05	Notting Hill Gate 駅		
	16:50	Bond Street 駅		
		Oxford Street/Bond Street/Regent Streets		
		エロスの像鑑賞		
	17:25	Piccadilly Circus 駅		
		Regent's Park 駅		
	17:55	Kings Cross St Pancras 駅		
	18:20	Russel Square 駅		
	18:30	夕食「Pub Bar Night & Day」		
28 日		ホテル発	7:00	徒歩
（土）	7:05	Russel Square 地下鉄駅	7:12	地下鉄
	7:50	King's Cross 駅	8:40	鉄道 Great Western
	9:20	Letchwerth-Gardencity 駅(1h 滞在)	10:20	鉄道 Great Western
		St Pancras 駅→地下鉄乗り換え	13:30	地下鉄
	11:40	London Paddington 駅	11:52	鉄道 Great Western
	13:25	Bath Spa 駅（バース市街滞在時間約 0.5h）	14:05	鉄道 Great Western
	15:35	London Paddington 駅	16:00	地下鉄
	16:13	Russel Square 駅		徒歩
	16:20	大英博物館		
	18:00	ホテル着		
	18:30	夕食「バーガーショップ；Byron」		
29 日		チェックアウト後ホテル発	6:45	チャーター車
（日）	7:30	ヒースロー空港	9:30	LH901 便
	12:20	フランクフルト空港	14:00	LH736 便
30 日	9:30	中部国際空港	10:32	自家用車
（月）	13:20	自宅着		

ＮＰＯＲＥＦ海外研修 2019 宮本好昭・谷口さとみ行動記録

月日	時刻	内容
9 月 23 日 （月）	8:00 10:10 16:50 17:30 19:30 20:00	中部国際空港　集合、搭乗手続き 離陸（ＬＨ７３７） フランクフルト国際空港　乗り継ぎ（ＬＨ９４６） マンチェスター国際空港　着陸 ホテル着（ﾒﾙｷｭｰﾙ･ﾏﾝﾁｪｽﾀｰ･ﾋﾟｶﾃﾞﾘｰ） 夕食「ホテルレストラン；Level3」
9 月 24 日 （火）	9:00	ホテル出発 ・マンチェスター市街地調査 ピカデリー・ガーデンズ～マンチェスター大聖堂～科学産業博物館・昼食～キャッスル・フィールド～ジョン・ライランズ図書館）
9 月 25 日 （水）	8:15 9:30 18:00	ホテルチェックアウト後、リヴァプールへ出発（高速列車） ホテルチェックイン（ﾎﾘﾃﾞｲ･ｲﾝ･ｼﾃｨ･ｾﾝﾀｰ）後、テルフォードへ出発 ・アイアンブリッジ調査（高速列車とバス） Liverpool Lime Street 駅→Chester 駅→Shrewsbury 駅→Shrewsbury Bus Station→Ironbridge Museum バス停→アイアンブリッジ、アイアンブリッジツールハウス、昼食→Ironbridge Museum バス停→Shrewsbury Bus Station→Shrewsbury 駅→Crewe 駅→Liverpool Lime Street 駅→ホテル着 夕食「Ctafty Chandler」
9 月 26 日 （木）	9:30	ホテル出発 ・ビートルズの歴史散策　マジカルミステリーツアー（専用バス） ・海商都市調査 アルバートドック～海洋博物館～リヴァプール博物館
9 月 27 日 （金）	8:20 12:50	ホテルチェックアウト後、ロンドンへ出発（高速列車） ホテルチェックイン（ﾌﾟﾚｼﾞﾃﾞﾝﾄ）後、ロンドン市街地調査（地下鉄） アビィ・ロード～ベイカーストリート～バッキンガム宮殿～ウエストミンスター寺院～国会議事堂・ビッグベン～ロンドン塔～タワーブリッジ～ミレニアムブリッジ 夕食「Carluccio's」
9 月 28 日 （土）	8:30 18:30	ホテル出発 ・クリフトン吊り橋とバルトニーアーチ橋調査（地下鉄と高速列車とバス） Russel Square 地下鉄駅→London Paddington 駅→Bristol Temple Meads 駅→Bristol Temple Meads バス停→Clifton Village バス停→クリフトン吊り橋→Clifton Village バス停→Bristol Temple Meads バス停→Bristol Temple Meads 駅→Bath Spa 駅→バルト二―アーチ橋→Bath Spa 駅→London Paddington 駅→大英博物館 夕食「Byron」
9 月 29 日 （日）	6:45 9:30 14:00	チェックアウト後ロンドン・ヒースロー空港へ、搭乗手続き 離陸（ＬＨ９０１） フランクフルト国際空港　乗り継ぎ（ＬＨ７３６）
9 月 30 日 （月）	9:30	中部国際空港　着陸、解散

ＮＰＯＲＥＦ海外研修 2019 三輪裕一・三輪香奈枝行動記録

月日	着時刻	場所	発時刻	移動手段
9月23日（月）			4:40	自家用車
	4:55	自宅	5 :00	自家用車
	7:23	中部国際空港	10:30	LH737便
	15:50	フランクフルト空港	17:10	LH946便
	17:30	マンチェスター空港	18:30	チャーター車
	19:30	Mercure Manchester Piccadillyチェックイン		
	20:00	夕食「ホテルレストラン ; Level3」		
24日（火）		ホテル発	9:39	徒歩
	9:40	Picadilly Garden・トラムホーム	9:40	メトロ・リンク
		purpleの2　Altrincham 行き	8:50	徒歩
	10:00	Old Trafford駅		メトロ・リンク
	10:17	マンチェスターユナイテッド　ｻｯｶｰｽﾀﾃﾞｨｱﾑ	10:17	徒歩
		Shopping@オフィシャルMega store		
	11:26	Old Trafford駅	11:28	メトロ・リンク
		Picadilly Garden・トラムホーム		
	13:15	Picadilly Garden・トラムホーム	13:15	メトロ・リンク
		St Peter square　駅 乗り換え		
	13:41	Exchange square　駅	13:41	徒歩
	13:43	National Football Museum　見学	14:50	
	15:00	Manchester Cathedral　見学	15:30	徒歩
	15:40	The John Rylands Library　見学	16:40	徒歩
			18:00	徒歩
	18:00	夕食「中華街 ; 中国城」		メトロ・リンク
25日（水）		チェックアウト後ホテル発	8:00	徒歩
	8:15	Manchester Piccadilly 駅	8:48	鉄道
	9:28	Liverpool Lime Street駅	9:30	徒歩
	9:35	Holiday inn Liverpool チェックイン	10:20	徒歩
	10:25	Liverpool Lime Street駅	10:36	鉄道
	11:24	Chester駅	11:30	徒歩
		チェスター旧市街地視察		
	12:50	昼食「サンドイッチ店 ; The York Roast Co.」	13:20	
	13:40	休憩「地ビール店 ; Tap」	14:00	
	15:00	チェスター・バス・ターミナル	15:20	路線バス
	15:35	Chester駅	15:45	鉄道Mersey rail
	16:30	Liverpool Lime Street駅	16:35	徒歩
	16:45	ホテル着		
	18:00	夕食「Bold St. ; Pub　　」		

26日（木）	10:40	ホテル発	10:40	徒歩
	10:44	Queen Squer バスセンター	11:00	
	11:29	17 AinTree Univercity Hospital 行き　バス	11:29	バス
	11:30	Anfield サッカースタディアム		徒歩
	12:00	Liverpool Football Club スタディアムツアー Shopping@offisial shop		
	14:25	Queen Squer バスセンター *これ以降の詳細は* *行動報告に記載*	14:25	バス
	15:43	Liverpool Cathedral	16:47	バス
	17:10	ホテル着	18:15	
	18:30	夕食「中華料理；四季」		
27日（金）		チェックアウト後ホテル発	8:20	
	8:30	Liverpool Lime Street駅	8:47	鉄道Virgin Train
	10:30	Stafford駅（鉄道故障乗換）	10:41	
	11:59	London Euston 駅	12:15	徒歩
	12:50	ホテル・プレジデント・チェックイン	13:40	
	14:55	大英博物館	14:45	徒歩
	17:05	ホテル着		
	17:50	夕食「Pub Bar Night & Day」	17:45	徒歩鉄道
28日（土）		ホテル発	10:25	徒歩
	10:40	Holborn地下鉄駅	10:45	地下鉄
	10:55	Oxford Curcus地下鉄駅		徒歩
	11:00	デパートLiverty	12:00	
	12:00	Oxford Curcus地下鉄駅		地下鉄
	12:10	Victoria地下鉄駅	12:15	徒歩
	13:23	ウエストミンスター寺院	14:25	徒歩
	13:35	国会議事堂・タワーブリッジ・ロンドン塔		
	15:13	バッキンガム宮殿		
	15:59	Victoria地下鉄駅	16:00	地下鉄
	16:20	Holborn地下鉄駅		
	16:30	ホテル着		
	16:50	Russel Squer 地下鉄駅	17:00	地下鉄
	17:00	Arsenal 地下鉄駅		
		shopping@studium shop	17:5	地下鉄
	18:00	Russel Squer 地下鉄駅	0	
	18:30	夕食「バーガーショップ；Byron」		徒歩
29日（日）		チェックアウト後ホテル発	6:45	チャーター車
	7:30	ヒースロー空港	9:30	LH901便
	12:20	フランクフルト空港	14:00	LH736便
30日（月）	9:30	中部国際空港	10:32	自家用車
	12:45	自宅	12:45	

英国（イングランド）研修報告書

デルタコンサルタント　西谷光史

1.はじめに

高校の頃のインドネシア、大学での旅行でイタリア、短期留学でタイ、そして今回の REF 研修を加え 4 度目の海外への訪問となった。イタリア・イギリスとヨーロッパへは 2 度目となるが、この圏域の人々は公園や広場といったオープンスペースへの意識が違うように感じた。しかしながら、イギリスは日本と類似点も多い(車の通行が左側、国土が自然形式)ことにも気づいた。大学時代には交通（とりわけ街路）に着目して研究をしてきたこともあるので、講義やゼミ等で聞いていた事例を実際目にすることができたのは、非常に刺激になった。今回の私の報告では、交通事情や広場などのオープンスペースにも触れていき、各都市の簡単な概要や写真を掲載しつつ記していきたいと思う。

2.マンチェスター

2-1.都市の概要

マンチェスターはイングランド北西部に位置している、面積 115.65 ㎢、人口 458,100 人の都市である。綿工業の発展で、産業革命において中心的な役割を果たし一時はロンドンに次ぐ大都心となったが、80 年代の産業構造の転換によって急速に衰退していった。88 年にはうち捨てられた工場や倉庫、運河といった資産の再活用を図り、地域活性化を図ろうとした経緯がある(セントラル・マンチェスター都市開発公社の戦略)。この開発の表舞台に立ったものの 1 つとして路面電車（メトロリンク）がある。この戦略以前では地元自治体との軋轢が起きていたが、この事業は、それらの反省を活かし地元協調路線に切り替えている。そのため、マンチェスターにおけるこの事業は、最も成功した事例の 1 つとして宣伝されている。

中心部の主要な駅としては、Manchester Piccadilly 駅、Victoria 駅がある。特に Victoria 駅は解放感が強くデザイン重視の駅であると感じた。Piccadilly 駅はヨーロッパでは多い頭端式のプラットホームであった。

写真-1　Victoria Station 外観

2-2.交通の取り組み

マンチェスター市内における、主な交通手段として、トラムとバスがある。しかしながら、今回のマンチェスターにおいては公共交通を利用せずに徒歩のみで調査を行ってきた。特に今回の研修対象地となった都市の中でトラムが走行していたのは、マンチェスターのみであった。

写真-2　メトロリンク（Manchester Piccadilly 駅内）

8 路線があり、マンチェスター中心の Piccadilly 駅から市内各所に伸びている。もともとこのトラムは、かつての鉄軌道と道路の一部を使って新設したものであり、2 両編成となっている。イギリスの鉄道の特徴なのか(ロンドンもそうだった)料金はゾーンで区分されている。隣の駅まで利用する場合と同じゾーンの端の駅まで利用する場合で料金が変わらないシステムである。もちろん、1day パスはあるが、どこのゾーンまでトラムを利用するか最初に選

択する必要がある。また、ピークタイムとオフピークタイムで料金の違いがあり、Weekday の午前 9 時半までがピークタイムとなる。

調査している時点では知らなかったが、マンチェスターはバス路線が充実していたそうだ。市内には 3 つのルートを通る「シャトルバス」が運行しており、市営バスと併用すれば、大抵の観光地を周遊することができる。市営バスは赤色の The イギリス感がある 2 階建てのバスで多くの利用者がいる。

Victoria 駅の付近に大型のショッピングモール(以下 SM)があり、その周りの道路はペデストリアンゾーンとして整備されていた。近年、日本でも取り組みが増えてきたライジングボラードによる車の通行規制をとっており、搬入者以外は通行不可となっていた。また,このゾーンの主要な通りにおいては、トラムが走行しており、トラムによるトランジットモールを初めて目にしたため非常に感動をした。

写真-3　ペデストリアンゾーン内の街路

公共交通が充実している都市ではあるが、健脚な方であれば、徒歩のみで大抵のポイントには行けるため、各ポイントをゆっくり周りたい人は、公共交通を利用して周遊するのも 1 つの手であると感じた次第である。

2-3.広場

マンチェスターには Manchester Piccadilly 広場という有名な広場がある。この広場はメトロリンクの駅と隣接しており、駅前広場としての役割に加え、憩いの場としての役割を有していると個人的には感じた。当日はあいにくの雨だったため人はいなかったが、広場内のカフェ・屋根付きオープンカフェには多くの人が佇み、広場の代用として利用していたこともあり、晴れ間にはそれと同等の人が広場を憩いの場として利用するのではないかと思う。

写真-4　Manchester Piccadilly 広場

3.チェスター

3.1 都市の概要

イギリス 3 日目は BritRail Pass を利用し、リバプールからチェスターへ移動した。チェスターはイングランド北西部に位置するチェシャー州の中心都市であり、人口は約 32 万人ほどである。

写真-５　城壁内ザ・クロスの状況(北側を望む)

チェスターの歴史は古く、ローマ時代までさかのぼる。中世になるとヴァイキングの侵略を受けたアルフレッド大王の娘である、エセルフレダが撃退に成功し、街の城壁をさらに堅固なものとした。以降、街を流れるディー川の水運を利用した通商都市としておおいに繁栄した。旧市街に軒を連ねる白壁に黒い梁の家々もチェスターが繁栄していた証であり、イギリス国内では最良の状態で現存する城郭都市のひとつである。チェスターの町は城壁で囲まれ、4 つの門とメインストリートがあり、それが交差する中心部をザ・クロスと呼んでいる。城壁へは

城門の脇などに階段があり、美しい景色をみるポイントがいくつかある。

2-2.広場・オープンスペース(リバーサイド)

チェスター大聖堂の西側には広場がある。曇っていたせいか、それともグレー調だったせいかなぜかさみしい感じがしたが、それでもベンチには人が座り、台座にも座る人をちらほら目にした。ザ・クロス付近は特に街並みが整っており、ペデストリアンゾーンということもあり、人が賑わっている感じがした。

写真-６　ディー川沿いの様子

城壁に上り、ディー川のある南側へ進むと、クルーズ船の乗り場がある。河川沿いにはベンチがほぼ一定の間隔で設置されており、すべて埋まっている状態であった。風も強くなくのんびりと時間を過ごせる空間ができており、ゆとりが感じられた。老後はこのような静かでぼんやりと景色を眺めながら過ごすのも悪くないと改めて思った。

4.リバプール

4-1.都市の概要

リヴァプールはマージー川の河口にある港町で、1207 年にジョン王の勅命により建設が始まった。当時はアイルランドへの物資輸送が目的であった。成長し始めたのは 17 世紀のことで、チェスターの港が主であったが、ディー川に泥が蓄積し機能が低下したことから発展するようになった。イギリス・アフリカ・アメリカを結ぶ三角貿易の中心となり、特に、悪名高い奴隷貿易によって急成長することになった。また、原料の輸入港となり、マンチェスターと鉄道で結ばれてからはますます貿易港として発展するようにになった。

第二次世界大戦時にドイツ軍の空襲によって建物が破壊されたが、住宅建設をはじめ、イギリス最大のシーフォースド・ドッグの建設計画等を行って戦後復興を進めていった。1940 年代後半から繊維産業が衰退してしまい、イギリス国内で最も失業率の高い地域となってしまった。20 世紀後半になって復興計画をはじめ、現在ではヨーロッパでも代表的な文化都市としての地位を確保している。また、アルバートドックをはじめとした歴史的に貴重な建築物を有している地域として、観光に力を入れている。

写真-７　アルバートドック

4-2.交通環境・ペデストリアンゾーン

今回は英国鉄道のライムストリート駅をおり、拠点のホテルへ向かった。このライムストリート駅は、ヨーロッパではよくみられる頭端式のプラットホームであり、長距離路線が数多く発着している。

写真-８　ライムストリート駅

市内の移動は主にバスである。駅周辺にショッピングモールや観光資源があるため、大抵は歩行で事足りる。レンタサイクルも実施しており、市内のあちこちにステーションがあるため、使いやすい。ただし、予約制であり、ネット環境がつながっていないと海外では使えず、予約の際に得られるナンバー

を入力して使えるようになるとのことである。リヴァプール・ライムストリート駅と港の間にはショッピングモールがあり、ここも歩行者専用の空間となっていた。搬入する車両のみ通行できるようにライジングボラードで流入車両を規制しており、車の通行が少ないため、道いっぱいに歩行者が遊歩している状況である。ロンドンの Bond Street 等もそうであるが、とりわけファッションや飲食店が立ち並び、若者が特に多い気がした。もちろん高齢者も多くいつでも休憩できるようにベンチや植樹の台座などしっかり休めるようにストリートファニチュアの整備も怠ってない。

写真- 9　リヴァプールモール内の様子

5.レッチワース

5-1.都市の概要及び感想

E.ハワードの田園都市論でおなじみのレッチワース。ロンドンからは高速鉄道を利用して 40 分ほどの北西の位置にある。大都市の弊害をなくすため都市と田園の両者のいいところを合わせたもので、周囲を農地のベルトで取り囲み、人口を約 3 万人に抑えるよう計画している。

今回は所要時間 1 時間程度であり、あまり予備知識がないまま散策を行うことになった。

駅を降りてすぐ目に見える Broadway は道路の中心を歩行者通路とし、両サイドが車道になっている通りで、座っている人はいないがベンチも設置され、植樹もされている。この通りの突き当りには公園があるが、晴れているにも関わらず公園には人ひとりおらず、寂しい感じがした。住宅街に入ると道路には駐車している列ができており、車の所有率の高さがうかがえた。買い物施設の駐車場においても車の数が多く見受けられ、歩いて生活するというよりかは車に頼る生活に近い。

今回のこの研修を機に、今一度Ｅ・ハワードの「明日の田園都市」を読み返してみようと思う…。しかしながら、教科書や参考資料などでよく目にするレッチワースをこの目で見ることができるとは思わなかったので、貴重な体験となった。

写真-10　レッチワース駅前の Broadway

写真-11　住宅街内の道路の様子

6.バース

6-1.都市の概要

サマセット州にあるバースは現在、英国有数の観光地として知られているが、その歴史は古く、紀元前 43 年ごろにローマ帝国がこの地を支配していたことに始まる。ローマ式浴場遺跡にみられるように、ローマ帝国支配化のバースは極めて栄えていた。

12 世紀には、近隣のコッツウォルズでとれる羊毛をブリストルに輸送する中継点として発展していたが、温泉地として注目されることはなかった。しかし、エリザベス王朝の時に温泉地として再び注目を集め、ジョージ王朝時代には、貴族や上級階級のリゾート地として栄えた。

現在でも街のいたるところで、ジョージア様式の優雅な建築物を見ることができる。

写真-12　バースの広場の様子(路上ライブ中)

バースもあいにく滞在時間が短く前述の大浴場の中まではみることはかなわなかったがアビーチャーチヤードと呼ばれる広場は路上ライブや大道芸などで賑わい、多くの人が滞在していたのが印象的であった。設置されているベンチは満席になっており、階段や地面に座っている人さえいた。

また、パルトニー橋と呼ばれる橋と建物が一体となった建築物を発見した。以前フィレンチェ(イタリア)を訪れた時にも同じような橋があったのを思いだした。フィレンツェの方は、橋が水面に反射したのがきれいだったが、バースでは、橋下流側が水落し？の連続となっておりこれはこれでいい味がでており、景観にすぐれていると感じた。

ちなみに、この橋付近で写真を撮影していたところ、アジア系(おそらく韓国の方)の女性に声をかけられ写真撮影をたのまれた。撮影後もしばらく英語で話してきたので、つたない英語しか話せない自分を悔んだ。以前もこんなことがあった気がするが、今後こんなことが起きてもいいように英語力を上達させたいと、改めて思わされた一日であった。

写真-13　パルトニー橋(下流側から望む)

7.ロンドン

7-1.都市の概要

2000 年を節目にロンドンはテムズ川南岸をはじめ再開発が進み「新しさ」を加えた。ウェストミンスター橋からグリニッジに至る南岸に未来志向の強い新名所が相次いで誕生した。特にロンドン橋までの川岸の遊歩道はミレニアム・マイル(イギリスはヨーロッパの中で独立した存在であるため地図の表記が㎞ではなく mile である)と呼ばれて、その起点に大観覧車ＢＡロンドン・アイが新名所として誕生した。

ロンドンは学問や金融・政治の中心でとどまらず、シェイクスピアをはじめエンターテイメントが繁栄し続けた都市でもある。残念ながらコヴェントガーデン付近にあるオペラ・ハウスへは行けなかったが、演劇の歴史を代表する劇場の１つである。その他にも、音楽の公演に使用されるコンサート会場は 90 にものぼり、バービカン・ホール等世界的にも有名な音楽会場がある。

ファッションにおいても、ボンドストリートやリージェントストリート界隈には、私でも知っているような名店が立ち並んでいた。また、ロンドンにはマーケットが多いらしく、私が行ったときはしていなかったが、映画「ノッティングヒルの恋人」のロケ地であるノッティングヒルでも休日など若者や観光客で賑わうらしい。このノッティングヒルは建物がパステルカラーとカラフルになっており、今でいうインスタ映えしそうなまち並みであった。

写真-14　ノッティングヒルの建物群

7-2.交通に関して

ロンドン滞在中の主な交通手段は地下鉄であった。アメリカでは地下鉄のことは「SUBWAY」だが

イギリスでは「UNDERGROUND」や「TUBE」とよばれることが多い。ロンドンの地下鉄は世界で最も古い歴史を有しており、営業距離でみると世界２位の距離を誇る(ちなみに１位は上海地下鉄)。マンチェスターのメトロリンクと同様に、ロンドンの地下鉄においても料金体系はゾーン制をとっている。日本でいう ICOCA や SUICA 等の交通系 IC カードがこの地下鉄でもあり(Oyster card)これを使うと何度地下鉄を利用したとしても、１日７ポンドまでしか料金は取られない。１日に何度も利用する人にとっては、だいぶ重宝できるカードである。ちなみに私自身このカードを使用して、２日で 20 ポンド以上は地下鉄を使っているので大分得している。

また、世界最古というだけあって、トンネルの坑口が非常に小さく、それに合わせて鉄道も小さくなっている。

写真-15　ロンドンの地下鉄

街なかには、自転車の通行も多いのが目立った。ロンドンではシェアサイクルを実施しており、料金体制も独特である。市内に複数のステーションがあり、レンタサイクルが観光地などの限定されたエリアで運営されているのに対し、都市部より広い面積で大規模におこなわれている。2010 年の７月にサービスが開始され、渋滞の激しい中心部において、クルマ、鉄道、バスの利用者を自転車にシフトさせようという狙いがある。長時間ほど割高な課金システムとなっており、30 分以内は無料で一時間以内は 1 ポンドだが、利用時間が長くなればなるほど料金が増え 6 時間では 35 ポンドになる(日本円でおよそ 4750 円)。これは盗難を防ぐためのシステムである。

また、鉄道車両に自転車を載せることはヨーロッパでは常識となっており、最近では、旅行者だけでなく、平日においても自転車を持ち込む人が目立っているそうだ。ロンドンのパディントン駅でも中核都市からの列車が到着する度、自転車をぶら下げている人が必ずいる。実際に自転車を地下鉄に載せる人もいた。

写真-16　サイクルステーションの様子

8.最後に

今回ＲＥＦ40 周年記念事業として英国研修に参加させていただいて、非常に貴重な経験をさせてもらった。駅のデザインやまち並み、景観など日本では目にすることができないところを目にし、非常に刺激が多い７日間であった。研修前に英国について少し予備知識を入れていくべきだったと少し後悔しているが、それでも楽しく過ごすことができたし、これからの自分の課題(英語・「明日の田園都市」を読むなど)もできたので、達成できるよう精進したい。

〈参考資料･HP〉

1) 岩見良太郎：「場所」と「場」のまちづくりを歩く
イギリス篇・日本編　麗澤大学出版会
2) Transport for Greater Manchester
https://tfgm.com/public-transport/tram
3)芦川智 編　芦川智・金子友美・鶴田佳子・高木亜紀子 著
世界の広場への旅 もうひとつの広場論　彰国社
4)定松 正・蛭川 久康 編著　遠藤秀一・佐久間康夫・中林正身
米山明日香 著　風土記イギリス自然と文化の諸相　新人物往来社
5)Liverpool Map　A visitor's guide to getting around Liverpool
Mayor of Liverpool
6)LETCHWORTH TOWN SERVICE
7）地球の歩き方 2017～2018　イギリス
8）秋山岳志：自転車が街を変える　集英社新書

英国の水辺・歩道橋と商業開発

名古屋産業大学名誉教授　加藤哲男

１．はじめに

筆者が初めて英国を訪問したのは 2003 年 2 月のことで、勤務していた名古屋産業大学の一期生の海外研修に同行した時のことである。当時のロンドンでの宿泊先は地下鉄 Regent's Park 駅近くの International Student House で一泊 3,000 円程度の宿賃であったが、8 名の相部屋で、隣の部屋の騒音が煩くて眠れなかった記憶がある。ロンドン市内ではビッグ・アイに搭乗し、タワーブリッジ界隈のテームズ河畔を徘徊した。また、キングス・クロス駅から近郊電車に乗り、ウェルウィン、レッチワース、ケインブリッジの 3 都市を訪問し視察したのであった。

今回のＮＰＯＲＥＦ海外研修では、ロンドン以外にマンチェスター、リバプール、チェスター、ブリストル等を訪問したことから、本稿ではこれら諸都市における水辺、歩道橋および商業開発をテーマとして報告を取り纏めることとする。

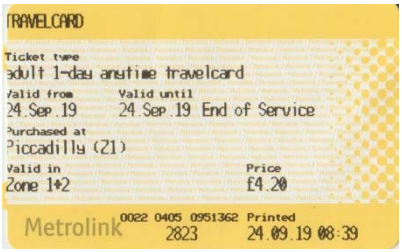
渡航前に資料収集を試みたところ「イギリスの水辺都市再生：ウォーターフロントの環境デザイン」[1]という 2010 年 4 月発行の興味深い書籍を入手した。そこで、今回の渡航では、この書籍で紹介されているマンチェスター、リバプール、ロンドン、ブリストルの水辺や商業施設を実際に訪問し、現地で実物を体感してくることを目的としたのであった。

２．マンチェスター

(1) メトロリンクとブリットレイルパス

長時間のフライトの末に、マンチェスター到着が夕暮れであったこともあり、夕食をホテルのレストランで済ませて早々に休んだが、翌 24 日の朝食の際にホテルの眼前にトラム（Metro link）の電停（Piccadilly Gardens）があることを発見した。（写真－１）

翌日のリバプールへの移動の際に利用することになる Piccadilly 駅の下見を兼ねて、ホテルから徒歩で Piccadilly 駅に向かった。Piccadilly 駅の乗客入口は二階部分になっており、車道から分離した歩行者専用のルートが通勤客で混雑していた。駅では今回の英国内鉄道で利用するブリットレイルパス（Brit rail Pass）の使用認証手続き（Validation）窓口とリバプール行きのホームを確認した後、一階へ降りてトラムホームに向かった。そして、ホームの券売機でトラムの一日フリー乗車券(Zone 1+2)を係員のサポートを得て購入し、入線してきた車両に乗車したのであった。



図－１　トラムの一日フリー切符

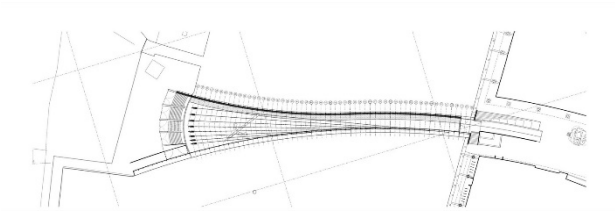
写真－１　Piccadilly Gardens(左上)とトラム電停

図－２　ブリットレイル・フレキシー・パス

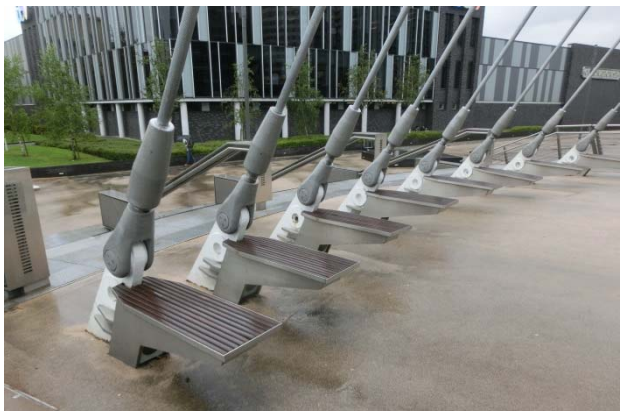
(2) メディアシティＵＫの歩道橋

マンチェスターでの最初の目的地は、市街地の西部に位置するサルフォードキーズ地区にある「Media City ＵＫ」である。サルフォードキーズは、旧マンチェスタードックの敷地にあるマンチェスター船運河の東端にあり、1982 年に造船所が閉鎖された後、英国では最初で最大の都市再生プロジェクトの１つになった。地区面積 81ha のうち 15ha の開発が 2008 年に着手され、BBC がロンドンからマンチェスターに移転することを公表して、2010 年に一部活動を開始している。

写真－２　Media City Footbridge



図－３　Media City Footbridge　平面図[2)]



写真－３　Media city Footbridge の cable 定着部

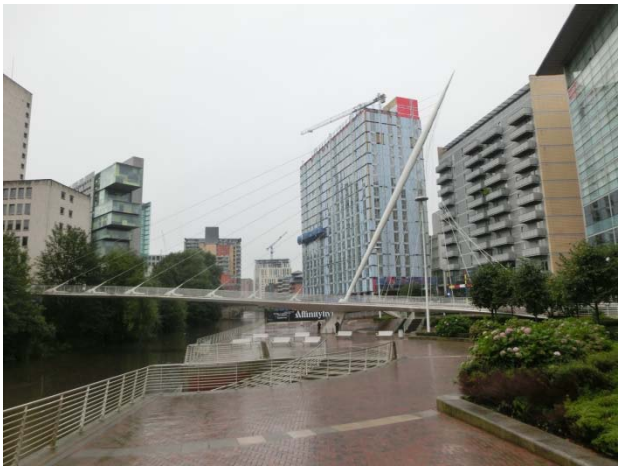
この地区に架設されている歩道橋が「Media City Footbridge」[2)]である。2012 年架橋の 65m と 18m の非対称 2 スパンの斜張橋で、サルフォードキー・スイングブリッジとも呼ばれている。この橋梁では驚いたことに短径間側の８本のケーブル定着部が橋面上にあり、椅子の形で造形されているのである（写真－３）。構造上重要な部分を丸出しにして、むしろ触らせようとしている設計思想は、日本では考え難い。なお、冒頭で紹介した書籍[1)]に掲載されていたのが写真－４の可動歩道橋で、筆者が渡橋しようとした際に一人にも拘らず僅かに揺れ動いたのは些か意外であった。

(3) トリニティ歩道橋

メトロリンクにキャッスルフィールド電停まで乗り、そこから徒歩でマンチェスター科学産業博物館に向かったが、入館早々に非常ベルが鳴り追い出されてしまったので、ジョン・ライランズ図書館(写真－５)を視察した後、目的のトリニティ歩道橋に向かった。アーウェル川に架かるこの橋は、スペインの建築家サンティアゴ・カラトラヴァによって設計され、1995 年に架設されている。この橋で一番目につくのは斜めに配置された支柱で60°の傾きをもつ。設計者に拠れば[3)]直立した柱が、美的観点からは静的、安定的であるのに対し、傾斜支柱はダイナミックな動きを感じさせる形態である特徴を持っているとのことである。また、主桁を支えるケーブルは通路の中心に一列で配置されているが、これは二つに分かれてカーブしているスロープ部の桁を吊りあげる力とバランスしているとのことらしい。ともかく、構造がシンプルながらも彫刻的優美さをもっていることが設計者の主張のようである。

写真－４　ミレニアム可動歩道橋

写真－５　ジョン・ライランズ図書館



写真－６　アーウェル川とトリニティ歩道橋

a：斜め支柱
b：主桁（メイン通路）部
c：二つに分かれるカーブしたスロープ部
d：メイン吊りケーブル
e：スロープを吊るバックステイケーブル

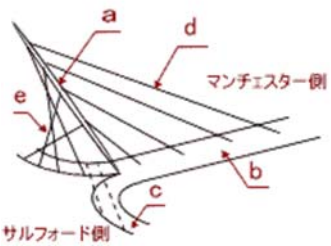


図- ４　橋の全体構成[3)]

３．チェスター

(1) ディー川

チェスターはウェールズ地方に面したイングランド地方の前線都市であり、チェスター城壁のそばを流れるディー川は、チェスターとウェールズのカーナフォンをつなぐ重要な連絡路として重要視された川である。この川の名前にちなんで、古代ローマ人は、かつてチェスターをディーヴァと呼んだとも言われている。

私どもはチェスター駅から徒歩でイーストゲートに至り、チェスター大聖堂を視察して昼食を摂った後、ニューゲートから城壁に登り、ディー川を俯瞰してブリッジゲートへ降りた。写真―７に示すように、ディー川の水量は豊富で、川幅も広く、舟運に活用された往時を偲ぶことができた。

(2) 地ビール店「TAP」

ブリッジゲートから 100m 程北上した所に、「地球の歩き方」[4]に掲載されているチェスターの地ビールが愉しめる店「TAP」がある。筆者の提案で、同行した団員ともども店内に入り、カウンターで試飲した後、テーブル席で好みの銘柄を心ゆくまで堪能することができた。実は、昼食を摂ったサンドイッチ店でもビールを飲みたかったのだが、店頭のメニューにビールが無く、止む無くコーヒーを注文したという経緯があってのことであり、充足感も一入であった。

写真－７　城壁からのディー川とオールドディー橋

写真－８　チェスターの地ビール店「TAP」

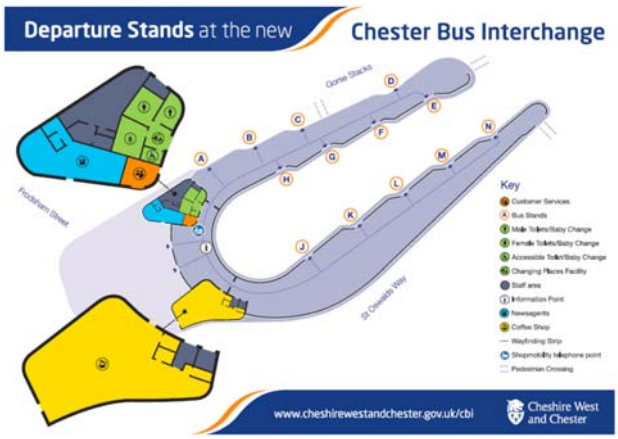
(3) チェスター・バス・インターチェンジ[5]

「Cheshire Live News」電子版 2018 年 7 月 28 日号[6]にチェスター・バス・インターチェンジが英国政府の「障害者旅行者向けの包括的輸送戦略」の先駆事例に選出されたと報じられた。その理由は、当該施設が視覚障害者用の触覚舗装であり、アクセスしやすい場所のトイレ、有料カートを利用する人々のための電話ポイント、対照的な色の座席、時刻表ディスプレイを備えているからということである。写真－９に外観を示したが、実は屋根の部分は植栽されており、夏なら緑色になっている筈である。

筆者らは、城壁の北東部からバス・インターチェンジを俯瞰した後、実地視察のために当該施設を訪問した。筆者は早速小用を果たしたが、案内は判り易く、管理衛生状況も良好であった。折角の機会なので、チェスターの鉄道駅までバスで移動することとし、掲示されている時刻表で大体は把握できたのだが、念のために案内所で次の便の発車時刻と発車レーンを確認し、運賃も一人１ポンドと教えてもらえた。私どもは障害者旅行者ではないと思うのだが、外国語の理解が不十分であれば、言語の障害者とも言えないわけではないので、英国政府戦略の受益者となるのであろうか。

チェスター駅でリバプール行きの発車時刻を調べていたところ、直ぐに発車する便を見付けて乗車したところ、来た時とは別会社の Mersey rail が運行する路線で、Mersey 川の左岸を北上して河川トンネルを通り、リバプール・ライムストリート駅に戻った。

写真－９　チェスター・バス・インターチェンジ



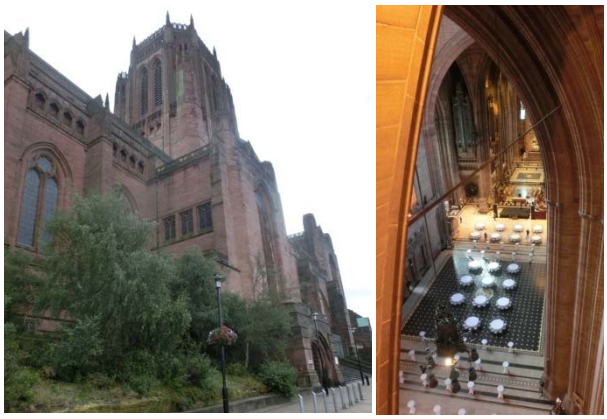
図－５　チェスター・バス・インターチェンジ平面図[6]

４．リバプール

(1) リバプール大聖堂

リバプールの二日目は小塚先生と市内視察に出かけた。ホテルから Mt.Pleasant 通りの坂をメトロポリタン大聖堂に向かって登って行くと、多くの若者の姿を見かけたが、リバプール大学の学生であった。リバプール大学は 1903 年に大学として認定されて以来 8 人のノーベル賞受賞者を輩出し、世界で最初に建築学科を創設した大学である。学生数は 2 万人で、商学、医学、薬学、化学の分野で世界最高水準の功績を築いてきている[7]。

メトロポリタン大聖堂前の交差点を Hope 通りに右折し直進すると、通りの沿道には Philharmonic Hall や Blackburn House 等の建築物があり、正面にリバプール大聖堂が見えてくる。敷地内にはひっそりと聖堂入口の案内があり、中に入ると聖厳な雰囲気に包まれるような気がした。展望塔へ行くための案内板によると、入場料金は堂内の売店で取り扱うとのことなので、早速売店で二人分 11 ポンドを支払い、エレベーターと階段を通って屋上に上がった。塔上からの展望は 360° 開けていて天候も良く、これから行く予定のアルバート・ドック方面のみならず、全方向の俯瞰景をしっかりと撮影することができた。(写真－11 参照)



写真－10　リバプール大聖堂の外観と内観

写真－11　大聖堂展望塔からアルバート・ドック方面

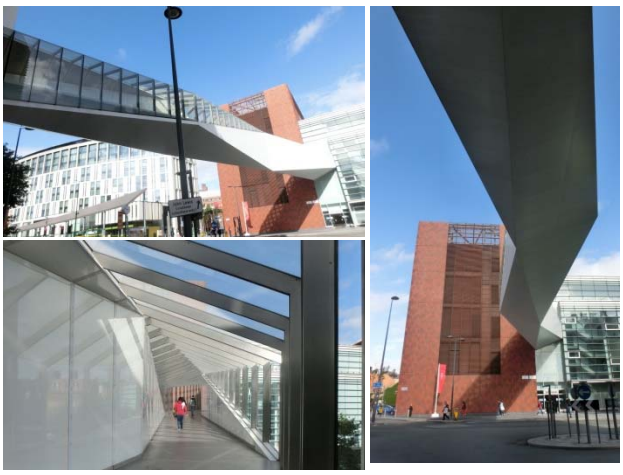
堂内の３階部分にはビクトリア朝およびエドワード 7 世時代の教会刺繍の絶妙なコレクションが展示されており、バルコニーからは聖堂内を天井部分から見下ろすことができるようになっている。(写真－10 参照)

(2) パラダイス通り歩道橋

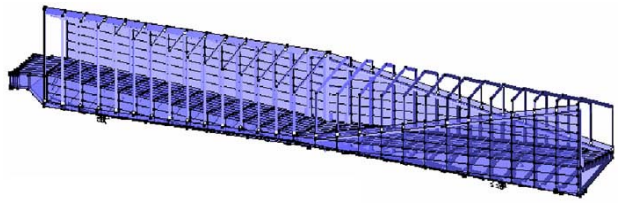
大聖堂から Duke 通りを下ると、突き当りが 2008 に完成したショッピングセンター「リバプール・ワン」である。そして、Duke 通りと交差するハノーバー通りに架設された歩道橋が「paradise street pedestrian bridge（パラダイス通り歩道橋)」である。私どもは、駐車場側の階段からこの歩道橋にアクセスしたが、写真―12 に示すように、この歩道橋は直橋ではなく、途中で折れ曲がっており、透明な外壁からは市街地が見渡せるのである。歩行空間に足を踏み入れると、前方通路の片側は外部が見えて、反対側は壁である。何とも言えない圧迫感と解放感が交錯した愉しい感覚を味わうことができた。

橋長 60m の単径間鋼橋はリバプール・ワン開発の一環として Wilkinson Eyre Architects によって設計されたもので、2006～2007 年に架設されている。架設にあたっては、図―６の構造図に示した三つの構造部分が工場で製作された後、現場で溶接されたものである。ステンレス鋼で作られた 43 個のアングル型フレームは、外側のガラスファサードと統合された LED 照明を備えた内側のアクリルパネルの支持構造として機能する[9]。

なお、この歩道橋は 2010 年にヨーロッパで最も古い建築環境賞の１つである Civic Trust Awards の表彰を受けている。



写真－12　Paradise Street Pedestrian Bridge
（左上；側面から撮影、左下；内部通路、右；下から撮影）



図－６　Paradise Street Pedestrian Bridge 構造図[8]

(3) リバプール・ワン商業センター

1998 年夏に市中心部の商業開発に関する調査を提案したリバプール市議会は、1999 年 4 月にパラダイス通り周辺地区 17ha の包括的再開発を決議し、2000 年 3 月にはグロブナーグループを開発事業者に選定した。2003 年には多国籍建設会社の Laing O'Rourke（レイン・オルーク）社が加わり、2004 年に文化財発掘が開始された。周辺区域が追加された 23.4ha の区域内に 13 万㎡の小売りスペース、14 画面のマルチプレックス映画館、2.1 万㎡のレストラン、カフェ、バー、600 の新しいアパート、2 つのホテル、オフィス、公園とバスターミナル機能を統合し、20 人以上の異なる建築家によって 40 の新しい建物が設計された[10]。

リバプール・ワンの開業は 2008 年 5 月 9 日で、式典にはエリザベス女王も臨席したとのことである。

私どもは、パラダイス通り歩道橋からジョン・ルイス百貨店に入り、店内を通ってパラダイス通りに出た。パラダイス通りはもとより、地区内の通路は全て歩行者専用道路であった。写真－13 の左側の建物はジョン・ルイス百貨店で、右側の中層ビルは Liverpool City Centre by Bridge Street というキッチン付の現代的宿泊施設である。私どもはリバプール・ワンという表示を求めて探索を始めたのだが、実際は既に地区内にいて、徘徊していたということになる。そして、二階に上がって盛土されたチャバス公園に辿り着いたところで、ヒルトンホテルを背景にした赤い表示板に「Liverpool One」という文字があるのを漸く発見した次第であった。（写真－14 参照）

(4) アルバート・ドック

チャバス公園とヒルトンホテルの間に設えられたプロムナードを西に進むと、アルバート・ドックに至る。残念ながら交差するストランド通りとは平面交差で、横断歩道では信号待ちを余儀なくされた。チャバス公園から立体交差の歩道橋を奇抜なデザインで架けることを何故考えなかったのか、訝ったものである。

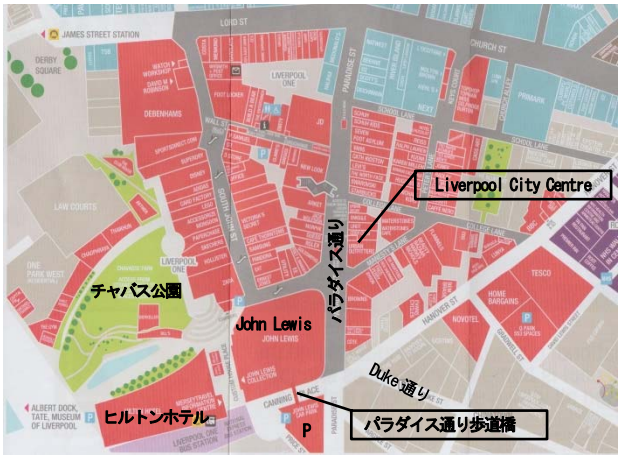
私どもは昼食を摂るために、アルバート・ドックの入口に聳え立つ「Pump House」内のレストランに入った。店内には大型のテレビが設置されており、折しも日本で開催中のワールドカップ・ラグビーが放映されていた。当日は日本対イングランド戦の開催日ではなかったこともあってか、店員も私ども日本人には親切であったような気がした。

昼食後は、最初にリバプール博物館を訪れた。何よりもまずリバプールという都市名の起源を知りたいと思い展示を見ていると、地殻変動で川（Mersey River）ができて、その周りに水が溜まった（Pool）ので地名の起源になったという全く当たり前の説明が読み取れた。階上ではジョン・レノンと小野洋子夫妻の特別展が開催されており、演奏のリスニングルームもあった。

また、ドイツによる空襲の被害状況も展示されていて、産業都市リバプールの様々な歴史が興味深かった。

写真－13　リバプール・ワンのパラダイス通り

写真－14　チャバス公園からヒルトンホテル



図－7　リバプール・ワン案内図[11]

写真－15　アルバート・ドックのエントランス

写真－16　リバプール博物館

写真－17　テート・ギャラリー

写真－18　アルバート・ドックの係留ヨット

(5) ビートルズ・ストーリー

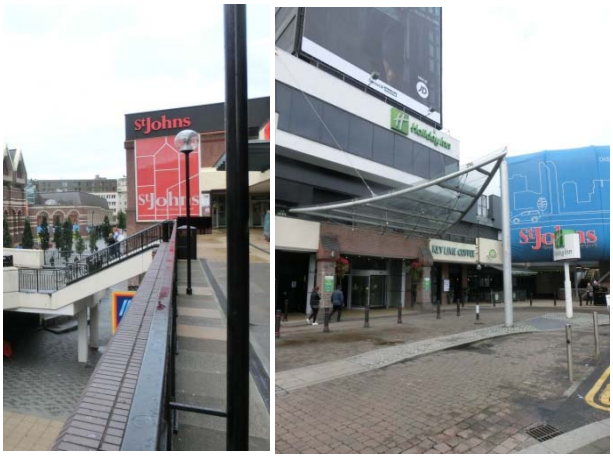
テート・ギャラリー内で同行の小塚先生と逸れてしまったので、暫く入口で待機していたが、時間も経過してきたので、ここからは一人で行動することとし、ビートルズ・ストーリーに入った。入口で料金を払うと係員が日本人かと聞くので、そうだと答えると日本語のレシーバーを渡してくれた。

入口から出口まで、ビートルズの結成時から、ドイツでの演奏や、アメリカへの進出など、有名になるための様々な画策や葛藤の展示内容が、イヤホンから流れてくる日本語の解説を聞くことで理解できるという仕掛けである。ビートルズのことを多少は知っていた積りであったが、本家本元の展示館での解説の中には初めて知ることも多く、興味深い１時間半を過ごすことができた。なお、写真―19 はリバプール市内に現存するキャバーンクラブという店のセットで、ビートルズが演奏活動した店であるが、ここでも十分雰囲気が味わえたことに満足して、本物の店には行かないことにしたのであった。

写真－19　ビートルズ・ストーリー内のキャヴァーンクラブ

(6) セントジョンズ・ショッピングセンター

私どもがリバプールで宿泊したホテル「ホリデイ・イン」はリバプール・ライムストリート駅の正面に位置しており、交通の利便性は大変良かった。隣にはコンビニもあって、重宝したのであるが、実はこのホテルに隣接してセントジョンズというショッピングセンターが立地していたのである。リバプール市内散策に出かける前に店内を視察したが、数多くの専門店やフードコートがあり、日本の SC と変わらないという印象をもった。木曜日の朝方であったために、買い物客はまばらであったが、立地場所が駅前でもあり、重要な商業空間として活用されているように思えた。



写真－20　セントジョンズ・ショッピングセンター

５．ブリストル

ロンドン～ブリストル間は急行列車の所用時間が片道１時間 40 分程度である。本稿の冒頭で紹介した書籍にブリストルの興味深い橋梁と商業開発が掲載されていたことから、ロンドン滞在の二日目は午前中をブリストル視察に充てることとした。ホテルを出て、最寄りのラッセル・スクエアー駅からキングス・クロス経由でブリストル行きの鉄道発車駅パディントンへ向かおうとしたが、何とキングス・クロスからパディントンに接続する地下鉄路線が運休しているではないか。週末の午前中はいつも運休なのか、はたまたこの日だけ運休だったのかは不明だったが、仕方がないので、別ルートでパディントン駅へ向かったのである。出発予定時刻より早めにホテルを出ていたので、パディントン8:00発の列車に5分前に乗車することができた。時間の無いときは､ブリットレイルパスは大変重宝で、係員にパスを見せるとすぐに改札を通過できた。車両内は原則自由席であるが、窓の上部にある座席表示が赤く点灯している座席は予約された指定席で、緑色表示の座席が予約無の自由席である。

ブリストルのテンプルミーズ駅には定刻の 9:41 に到着したが、ロンドンに戻る列車の発車時刻 11:30 までの滞在可能時間は僅か１時間 49 分である。この限られた時間で市内を駆け足で視察したルートを次頁の図－８に示した。

写真－21　バレンタイン橋（ Temple Quay Footbridge ）
（左上；上空写真[12]、右上；河岸側から撮影、下；全体構造）

(1) バレンタイン橋（ Temple Quay Footbridge ）

テンプルミーズ駅に近接するフローティング・ハーバー地区に 2000 年に架設されたのがバレンタイン橋である。この橋梁は鋼製斜張橋であるが、上部工の線形はＳ字型で河岸にアンカーを埋め込み、水路に架かる上部工と釣合わせており、支柱は河岸部に建てている。マンチェスターの歩道橋とも共通するが、構造部材が細く、何とも不安定に見えるが、地震や台風の無い国ならではのデザインと言われれば､頷くしかない。

この橋梁はフローティング・ハーバー地区開発のモニュメント的存在であるために、ある程度芸術的な色彩を帯びざるを得ないとも言えるようである。

(2) キャボット・サーカス

キャボット・サーカスは 10 年の年月と５億ポンドの資金を投入した商業開発で2008年９月25日に開業している。開発エリアには、ショップ、オフィス、映画館、ホテル、250 のアパートメントがある。合計 139,350 ㎡の床面積のうち 92,900 ㎡は小売店およびレジャー施設である[13]。８階建ての駐車場は2,500台収容可能であり、Park & Ride プロジェクトも順調に進んでいる[13]。この世界でも初めての全く新しいアーケード型のショッピングセンターは、サッカー場 1.5 個分のガラス屋根の複雑な造形と様々な素材と表現方法を用いた店舗デザインがそれぞれの魅力を競い、それらの店舗を集めた街区同士が覇を競う[1]のである。

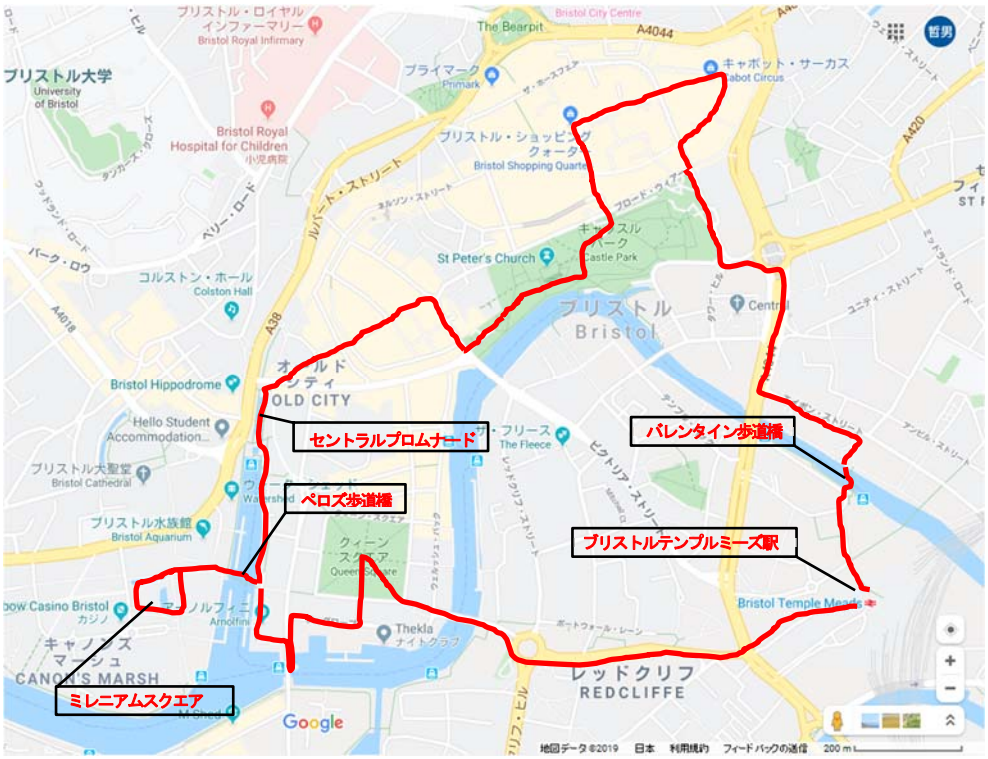
現在は、この Cabot Circus の他に Broad Mead、The Galleries、The Arcade の３地区が加えられた「Bristol Shopping Quarter」として商業活動が展開されている。

私どもが訪問したのは土曜日の午前 10 時過ぎであったが、残念ながら土曜日の開店時刻が 11 時であったために､構内は閑散としており客も殆どいなかった。店舗数や業種構成から考えると、営業時間になると、さぞ買い物客で溢れるのではないかと思われるような空間ではあった。

写真－22　キャボット・サーカスの建築物とガラス屋根

(3) ペロズ橋（Pero's Bridge）

ミレニアムスクエアとクイーンスクエアの間のハーバー水路に 1999 年に架けられたのがペロズ橋である。この歩道橋は橋長が 50m 程の 3 径間鋼橋で、上部工の両径間は固定されており、中央径間の 11mが「跳ね上げ」形式の可動橋である。そしてこの橋梁の最も大きな特徴は中央径間の橋脚上にあるラッパの形をしたモニュメントである。このラッパの形が映画の主人公の耳に似ていることから「Shrek の橋」とも呼ばれている。実はこの耳は、橋を跳ね上げる際のカウンター・ウェイトの役割を果たすものであり、単なる装飾ではなかったのである。写真－23 を見るとラッパのある橋脚が細長くなっており、ラッパが倒れる時の受け台でもあることが判る。なお、Pero というのは 18 世紀にカリブ海から連れてこられた奴隷の名前ということで、奴隷搬送の港であったブリストルの逸話として興味深いものである[14]。



図－８　ブリストル市街地移動行程図

(4) ミレニアムスクエア

ペロズ橋を渡ると 2000 年に造られたミレニアムスクエアに至る。鉄道の引き込みヤード跡地に、科学館“At-Bristol”とプラネタリウム、ショップ、テント構造の IMAX シアターなどが再開発の目玉として整備された。なお2017年11月に“At-Bristol”は”We The Curious”に改名されている。

私どもが訪問した際は、土曜日にも拘らず人出は少なく、科学館は改修工事が行われていた。このミレニアムスクエアの西側にはブリストル大聖堂、議事堂、ブリストル大学などが立地しているが、時間の制約があって訪問することは叶わなかった。

(5) テンプルミーズ駅舎

1840 年 8 月 31 日にロンドンのパディントン駅からのグレート・ウェスタン鉄道の西側の終点駅として開業したテンプルミーズ駅は、同鉄道の技師であるイザムバード・キングダム・ブルネルによる設計で建設された[15]。駅前広場には自家用車が乗り入れて駐車しており、バスの姿は見られず、多くの観光客が徒歩で駅に向かう姿が見られた。

写真－23　ペロズ橋（別名シュレック橋）

写真－24　ブリストル・ミレニアムスクエア

写真－25　ブリストル・テンプル・ミーズ駅舎

６．ロンドン

(1) セントポール大聖堂

♪…♪Early each day to the steps of Saint Paul's, the little old bird woman comes. In her own special way to the people she calls "Come buy my bag full of clams". Come feed the little birds, show then you care, and you will be glad if you do. Their young ones are hungry, their bests are so bare, all it takes is Tuppence from you. Feed the birds ……♪…♪

これは筆者が中学生時代に覚えた「2 ペンスを鳩に」という英語の歌詞で、ミュージカル映画「メリー・ポピンズ」の主演女優歌手ジュリー・アンドリュースが子守唄として歌ったものである。2003 年の訪英の際にもセントポール大聖堂を訪問しているが、今回の訪問でも改めて大聖堂の正面階段でこの歌を口遊んだのであった。残念ながら鳩の餌売りはおろか鳩もいなかったが、映画で表現されていた空一杯の鳩の群れを空想しながら、暫しの間大聖堂の空から見守ってくれている筈の聖者達を思い描いていたのであった。

写真－26　セントポール大聖堂の階段

(2) ミレニアム・ブリッジ

ロンドンのミレニアム・ブリッジは 1996 年にコンペが行われ、1998 年に着工し 2000 年 6 月に完成している。構造は鋼製吊橋で総工費は 1,820 万ポンド(25.48 億円)である。橋長は 370m,メインスパン長は 144m、吊り下げ高さは 2.3m である [16]。吊橋の支柱は橋脚上にV字型に建てられ、その支柱の先端の両側に 4 本ずつのケーブルが結束され、そのケーブルに繋がれた鋼材に上部工の桁が載せられている。

このミレニアム・ブリッジは開通直後に横揺れが発生して二日後に閉鎖された。1940 年に吊橋が共振で落橋したタコマナロウ橋を想起するが、共振を抑制するダンバーを追加工事して 2002 年 2 月に通行が再開されている [17]。吊橋の共振対策は十分になされていると思われるが、新しい形状の吊橋では検討が不十分であったとしか言いようがない出来事である。

土曜日の午後のテームズ河畔は人出が甚だしく、セントポール大聖堂からミレニアム・ブリッジへ続く遊歩道は多くの観光客とロンドンっ子で溢れていたが、橋梁は横揺れもなく安定していた。

写真－27　ミレニアム・ブリッジの吊橋構造

写真－28　ミレニアム・ブリッジ横方向から

写真－29　タワーブリッジと市庁舎

写真－30　ツーリー通りのビル連絡歩行通路

(3) タワーブリッジ界隈

テームズ河畔の歩行者道に溢れる人波を掻き分けて、タワーブリッジを目指した。途中でロンドンブリッジ駅と隣接するビルを連絡する歩行通路（写真－30）を見かけたが、リバプールのデザインを見た後なので、ロンドンのデザインに落胆と安堵を感じてしまった。

タワーブリッジに隣接するロンドン市庁舎は、2002 年に完成した球形の大胆なデザインである。市庁舎周辺は広場になっており、タワーブリッジと対岸のロンドン塔が見渡せる絶好のビューポイントになっている。タワーブリッジも舟運に配慮した可動橋であり、塔の上部を繋ぐ通路は歩行者用として利用されていた。

(4) コヴェント・ガーデン

コヴェント・ガーデンと聞いて思い出すのは、映画「マイフェア・レディ」で主役のイライザを演じたオードリー・ヘップバーンが花売り娘を演じていた場所であったことである。

2003 年には訪問できなかったので、地下鉄ウェストミンスター駅から官庁街を抜けてトラファルガー広場を通り、ロンドン交通博物館が隣接するコヴェント・ガーデンに辿り着いた。セントポール教会前では、大道芸人の演技に人だかりがしていた。元々はロンドンの市場であったようだが、移転してしまい、現在は私どものような観光客相手の店舗や、地域住民のためのマーケットとして機能しているようである。

写真−31　コペント・ガーデンのマーケット

7．おわりに

16 年振りのイギリスは、駆け足ではあったものの、レッチワースとウェルウィンを含めて 7 都市を訪問することができた。12 年前のＩＲＥ海外研修以来のヨーロッパ訪問でもあったが、参加人数が少なかったこともあり、班別行動ではなく、個人行動が多かった。

16 年前と比較できるのはロンドン、レッチワース、ウェルウィンの 3 都市である。二つの田園都市は、基本的には大きな変化は見られなかったが、ウェルウィン駅前にあった筈のエベネザー・ハワードの肖像レリーフを今回は見付けることができなかったのが残念であった。その一方で、レッチワースでは前回は行けなかったハワード記念公園とハワード夫人記念館を見ることができたのが収穫であった。

ロンドンの印象は、季節が異なることもあるが（前回は真冬の 2 月）歩行者空間が充実していて、明るくなった印象がある。地下鉄が狭いことには変わりがなく、ビールは美味しかった。

何よりも良かったのは、参加者全員が事故も病気も無く帰国できたことであり、ここに参加者の方々に心から感謝の意を表する次第である。

注・参考資料

1) 樋口正一郎著「イギリスの水辺都市再生：ウォーターフロントの環境デザイン」（ヨーロッパ建築ガイド）鹿島出版会, 2010.4
2) Media City Footbridge / Wilkinson　Eyre；https://www.archdaily.com/799714/media-city-footbridge-wilkinsoneyre
3) Trinity Bridge；サンティアゴ・カラトラヴァ http://www.archstructure.net/contents/trinity/index.html
4) 地球の歩き方2019~20；㈱ダイヤモンドビック社2019.7.24
5) Chester Bus Interchange；Your Chester http://chester.yourwestcheshire.co.uk/pages/3503/1/Chester_Bus_Interchange.html
6) Cheshire Live News; 21:00、2018 年 7 月 26 日 https://www.cheshire-live.co.uk/news/chester-cheshire-news/chester-bus-station-chosen-launch-14952093
7) リバプール大学；ウィキペディア https://ja.wikipedia.org/wiki/
8) Structural Analysis and Design Software；Design of steel pedestrian bridge according to SIA standards https://www.dlubal.com/en/education/students/graduation-theses/000261
9) paradise street pedestrian bridge https://tuchschmid.ch/en/referenzen/detail/paradise-street-pedestrian-footbridge-liverpool/
10) Liverpool One；wikipedia https://en.m.wikipedia.org/wiki/Liverpool_One
11) LIVERPOOL　CITY　CENTRE　VISITOR　MAP
12) Temple Quay Footbridge Strcturae　；International Database and Gallery of Structures https://structurae.net/en/structures/temple-quay-footbridge
13) Cabot Circus - Wikipedia　；https://en.wikipedia.org › wiki › Cabot_Circus
14) Pero's Bridge - Wikipedia　；https://en.wikipedia.org/wiki/Pero%27s_Bridge
15) ブリストル・テンプル・ミーズ駅; Wikipedia https://ja.wikipedia.org/wiki/
16) Millennium Bridge　Structure; International Database and Gallery of Structures https://structurae.net/en/structures/millennium-bridge
17) ミレニアム・ブリッジ（ロンドン）；Wikipedia https://ja.wikipedia.org/wiki/

英国の地方都市を訪ねて

神戸市立工業高等専門学校　小塚みすず

はじめに

令和の時代に変わって初の海外が今回の英国研修となった。研修先の英国はEU離脱（ブレグジット）問題の最中にあり、英国とヨーロッパは重大な局面を迎えている。時代の変曲点での研修参加となった。

本研修は、マンチェスター、リバプール、ロンドンを拠点に参加者それぞれが行動計画を立てている。事前に加藤理事長から視察地や利用交通手段のほか便や到着・出発時刻が整理された調査計画が届いた。これを参考に、同行させていただく日程を決めたあと、個人行動の計画を立てた。私が実際に訪れた上記以外の都市は、イングランド北部のリーズ、ヨーク、イングランド北西部のチェスター、イングランド南西部のバース、そして、ロンドン郊外のレッチワース、ウェルウィンである。なお、最終的に訪問先が決まったのは機中であった。本報では、リーズ、ヨーク、バースの3都市を紹介する。

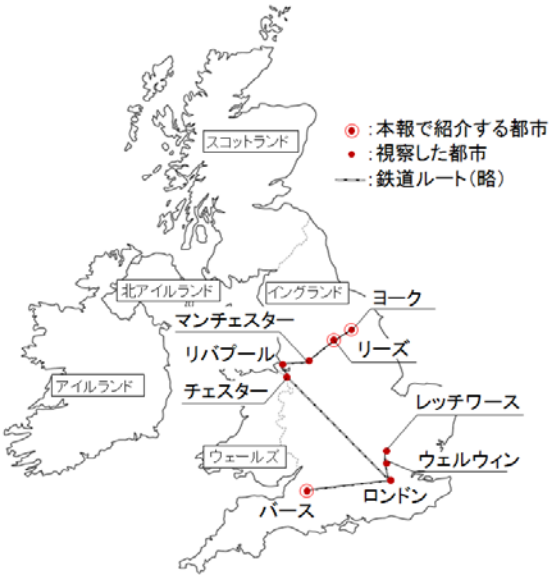


図１　訪問先マップ

１．LEEDS～新旧が融合するビジネスと若者の町～

1-1　リーズについて

リーズは正式には、「シティ・オブ・リーズ」と呼ばれ、英国のほぼ中央、イングランドのウェスト・ヨークシャー地方の中心に位置する。面積は 551.72km²、人口は約 77 万人。英国で 3 番目の人口規模の都市である。市内には 9 の大学と 14 の専門学校があり、6 万人以上の学生が暮らしている。人口の約 1／4 を若者が占める、若い活力に満ちた街である。

中世から農業が中心に栄えていたが、14 世紀ころより現在の仏国と英国の国境を決定した百年戦争の勃発がきっかけとなり、フランドル（フランダース）から毛織物の技術が持ち込まれ、羊毛、毛織物の生産で栄えた。地理的に交通の要衝であったことから流通拠点となり、多くの人や物資が集まった。その後、産業革命で 1816 年のリース・リヴァプール運河、1848 年の鉄道開通により金融経済の中核をなす都市として発展を遂げる。19 世紀、羊毛生産が不振になると産業転換を図り、現在の経済都市へとし成長を遂げた。

1-2　インフラストラクチャー

リーズ中心市街地の南にあるリーズ駅は年間約 3,100 万人が使用する大規模な駅であり、現在は工事中である（写真 1、図 1）。というのも、英国では新高速鉄道 (注1)「HS2」の建設計画がある。計画の「第 2 段階」であるマンチェスター及びリーズ行きの路線については、2014 年後半に詳細が発表され、2032～33 年に開通する見込みである。現在、ロンドン～リーズの所要時間は 2 時間 20 分であるが、HS2 開業後は 1 時間 28 分と 1 時間近くも短縮される。リーズ駅は交通ハブそして商業センターとしての機能を持たせ、年間 7,000 万人の利用駅となることを目指し、開発整備

（ｉ）リーズ駅正面　（ii）駅コンコース

（iii）通路の展示 REGO　（iv）駅正面の駐輪場

写真１　リーズ駅

図１　リーズ駅イメージ図

が行われている。駅および駅周辺はリーズ市議会、評議会、民間セクターのパートナーシップにより、市内美化、ストリート・ファニュチャーの改良、信号機の交換、歩行者空間の改善など多くのプロジェクトを進行している。

リーズ駅から西に約 1km の場所にバスのターミナル駅がある（写真 2）。ナショナル・エクスプレスのバス（長距離バス）はカークゲート・マーケットの横にあるコーチステーションに到着する。また、路線バス（中・近距離、郊外）はその東隣のシティ・バスステーションに発着する。待合所は 2 か所あり、コーチ（長距離バス）の待合所は人が少なく、静かであった。両ステーション内部はつながっており、シームレスな乗換ができ、便利である。また、市内には循環バスが走っており 1 週 19 の停留所がある。ルートは時計回りのみの運行。運賃は£1／回（図 2）。

1-3　ショッピングエリア（アーケードとマーケット）

リーズはショッピングやレジャーの中心地である。中心市街地はコンパクトで広い歩行空間が確保されている（図 3）。中心部には 1,000 を超えるショップと 300 超のバーやレストランが立地している。新旧の美しいアーケード街や歴史的な建造物があり、他の都市では経験できないような空間を創り出す、国内有数の商業都市と言える。有名な場所・建物を下記にあげる。

・Trinity　Leeds（写真 3）

2013 年にオープンした、リーズ最大級の規模の屋内ショッピングモール。オープン時には 13 万人以上の来訪が記録され、年間約 550 万人が訪れる。建物全体を覆うのはアーチ型の天井。ガラス製のため、屋内は明るく、空の様子も楽しむことができる。モールはイーストとウェストの 2 つのエリアに分かれている。イーストは 2013 年にオープンし、ウェストはかつてのリースショッピングエリアを再開発したエリアとなる。モールは週 7 日営業し、120 を超えるショップ、バー、レストランが入っている。モールの中央上部にはスコットランド人アーティストのアンディ スコットが手がけた 2 つの彫刻、布を運ぶ荷馬とローマ神話の女神ミネルヴァが置かれ、来客者を見下ろしている。

写真 2　バスターミナルの待合所・コンコース

図 2　循環バスルートおよび P&R 駐車場マップ

図 3　リーズ中心部　　（出典）VISIT LEEDS

・Briggate（写真 4）

リーズの主要な歩行者専用通り。主要なナショナルブランドの拠点であり、メリオンセンター、ライト、コア、トリニティ・リーズ、ビクトリア・ゲート、クイーンズ・アーケードなど、街を象徴する建物や空間につながる街路である。

・Victoria Quater（写真 5）

リーズ中心部にあるヴィクトリア朝時代のショッピングアーケード。2 つの主要アーケード、カウンティアーケードとクイーン ヴィクトリア･ストリートからなる。美しい装飾が施された 1900 年代築の旧エンパイア・パレス・シアターのファサードやアーケードには、建築家フランク・マッチャムが手がけた当時のインテリアが残っており、外観・内装ともに楽しめる。ロンドンを除き最大のジョンルイスデパートで 75 のデザイナーブランド、ビクトリアゲートカジノとリーズのハービーニコルズがある。ハマーソン開発で 2016 年に完成して以降、リーズは全国的に有数の商業都市となったと言われる。また、1875 年に建てられたグレード I に指定された建物の一部であるリーズキルケテマーケットは、ヨーロッパで最大の市場の 1 つである。週 6 日営業し、内部には 400 以上の屋台がある。

・Thorntons Arcads（写真 6）

ソーントンズ・アーケードは、リーズの中心地ヘッドロウとランズ・レーンの交差点に立地するショッピングアーケードである。

シティ・バラエティーズ・ミュージック・ホールのオーナーであったチャールズ･ソーントン（1820-1881）が 1873 年に現在のアーケードの場所に事務所や店舗などを建設し、その後 1878 年にソーントンズ・アーケードを建設した。アーケードは 3 階建てのガラス天井となっている。アーケードの北端にはウィリアムポッツとリーズの息子によって作られた時計仕掛け時計がある。アーケードの終わりには美しい女性の彫像が飾られている。アーケード内部には有名店を始めさまざまなショップが並んでいる。

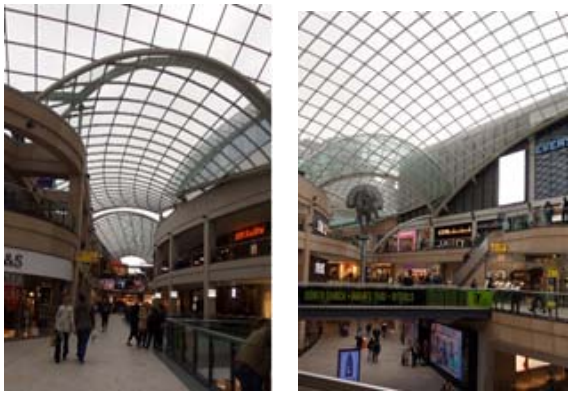


写真 3　Trinity　Leeds

・Leeds Corn Exchange（写真 7）

1864 年までこの町の商業の中心地として機能していた場所である。元々はリーズの穀物取引所として重要な役割を果しており、ヴィクトリア様式の歴史的建造物としても価値の高い史跡。建物はリーズ・タウン

写真 4　Briggate

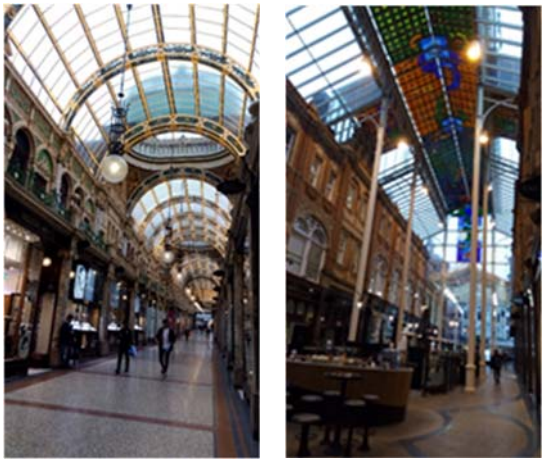


写真 5　Victoria Quarter

写真 6　Thorntons Arcads

写真 7　Leeds Corn Exchange（左：外観、右：内部）

ホールの建築家として名高いカスバート・ブロデリックの設計で、パリの歴史的建造物ブルス・ド・コメルスから着想を得たものとされる。現在は改装し、最新のリテール ショップ、ブティックが集まるファッションの発信地である。

この穀物取引所ではかつて、定期的にマーケットが開かれ、トウモロコシや小麦、大麦、ホップ、小麦粉や革製品が売買されていた。壮大なファサードの美しい石積みや建築様式、優雅な入り口のアーチをくぐると、巨大な円形の建物の空間が広がる。ドーム型の天井の下にはさまざまなショップが入っている。壁には小型のアーチ窓がずらりと並び、他にはないかわいらしくも洗練された空間が広がる。建物の中央には豪華な大階段があり、一 階と上の中二階とをつなぐ。

・Kirkgate Market（写真 8）

リーズ市内の中心地に位置するカーグゲートマーケットは、ヨーロッパの中でも最大級の規模を誇り約 800 もの店舗が軒を連ね、観光客をはじめ週に 10 万人が訪れる巨大なマーケットである。

その始まりは 1822 年に遡り、当時は屋外マーケットとして始まり、その後 1857 年に現在のマーケットの場所に落ち着き、規模を拡大していった、歴史あるマーケットである。順調に成長を遂げていたマーケットだが、1975 年には火災でその大部分が損傷した。しかし、人々の思い出のマーケットを復興させようという強い意志により建設当時を模して復元がなされ、今なおその美しいエドワード様式を残す。

マーケットでは食材、衣類、雑貨などがさまざまなものが扱われているが、あいにく今回は休日であったことから、多くの店が閉まっていた。

1-4　その他

リーズ中心部は東西にヘッドロウ、南北にパークロウと呼ばれるメイン通りが走る。ヘッドロウの北側には市役所、美術館（写真 9）、裁判所、大学などがある。パークロウの東はレストラン街や金融街があり、一方、西側はショッピングモール、市場、デパート、アーケードなどの商業地区となっている。とくにブリゲートの沿道には有名なショップが軒を連ね、商業都市リーズを象徴する場所となっている。

近年、リーズはワールドスポーツの地としても有名になっている。クリケット(ICC、Third Specsavers Ashes Test Mach)、自転車(UCI、Tourd Yorkshir)、トライアスロン(ITU)、女子ラグビー(IFAF)などの世界大会等が開催されている。このためのインフラや施設も整えられており、クリケットやラグビーが行われるヘディングリー・スタジアム（22,000 人収容）やエランド・ロードスタジアムなど、大規模のスタジアムも有する。2014 年にはツール・ド・フランスのグランデパール（開幕）がリーズで迎えられ、開幕セレモニーにはキャサリン妃とウィリアム王子、そしてヘンリー王子が出席した。ヘッドロウの路面にはスタート地点となったことが示されている（写真 10）。

今回、商業施設や交通施設を中心に調査したが、場所により客層や雰囲気が大きく異なっていた。ソーントンズ・アーケードは多くのショップ、レストラン、映画館があり、駅にも近いためか、にぎやかで若者が多い。コーン・エクスチェンジは最先端の個性あるショップが入っているためか客は少なく静かであった。クイーンズ・アーケード、ソートン・アーケード、カウンティ・アーケードは高級感が漂う非常に落ち着いた雰囲気であった。室内で展示販売されている商品に高級外車があったり、通路内に置かれたベンチ、照明、通路自体にも工夫が凝らされているように感じた。

写真 8　Kirkgate Market（上：外観、下：内部）

写真 9　リーズ市美術館

写真 10　Tour de France スタート地点

２．YORK～中世の趣を留める街並み～

2-1　ヨークについて

ヨークはイングランド北部のノース・ヨークシャー州に属する古都である。71 年にローマ人に築かれた街は要塞都市として発達したが、9 世紀に北欧からのヴァイキングに占領された。この時、彼らが町のことを「ヨーヴィック」と呼んだことから「ヨーク」と呼ばれるようになったと言われている。長い歴史の中でヴァイキングやノルマン人など多様な民族との争いを見続けてきた。そんなヨークは「ヨークの歴史はイングランドの歴史」 と言われることもある。ノルマン支配の中世以降はキリスト教信仰の中心地として、建造物が数多くの建造物が遺されている。12 世紀から 14 世紀にかけて造られた、町の周囲を取り囲む城壁、市の中央に位置するヨーク・ミンスター、中心街を通るシャンブルズなどはヨークを代表する観光地となっており、歩行者専用空間が広く確保され、中世の趣残る街並みを楽しむことができる。北西から南にかけて流れるウーズ川が町を 2 つに分けている。

ヨークの面積は 271.9km²、人口は約 20 万人。イングランド北部有数の大都市で、電車でリーズから約 30 分（6－7 本／時間）、ロンドンから約 2 時間（2-4 本／時間）と近郊の都市や大都市とのアクセスも良い。

市内の交通機関はバスが充実している。旧市街地は城壁に囲まれており、道が狭く、一方通行が多いこと、観光客が多いことなどから、一般の乗用車は通行しにくい。城壁内は中心部からほぼ徒歩 10 分に収まるコンパクトさで、徒歩での移動が最も便利だろう。城壁の内外には P&R 用の駐車場が多く整備されている。城壁内の道路は自動車アクセス地区と駐車場アクセル道路、その他の道路に分類され、城壁に沿って幹線道路に囲まれている（図 4）。その他、自転車レーンや駐輪場が整備されている。調査日はあいにくの大雨でゲリラ的な雨に見舞われたが、そんな中でも多くの自転車とすれ違った。鉄道駅とバスステーションが城壁外の南西側に位置する。城壁に沿って道路が通っているが、幅員は狭く、交差点部は複雑である。交通量は多く、信号による交通制御が必要である。

2-2　代表的な観光施設

中世の建造物が多く遺されている。見どころは城壁内の建造物と、駅のすぐ裏手にある世界最大規模の鉄道博物館である。以下、簡単に紹介する。

・York Minster（写真 11）

ヨーク・ミンスターの歴史は 627 年にノーザンブリア王の洗礼の為に建てられた教会に始まる。建設は 13 世紀初頭から木造建築から始まり、火事や戦火などの被害を受けては再建され、1472 年に現在の姿に完成した、イングランド北部を代表する大聖堂である。ゴシック建築としては国内最大とされている。

図 4　ヨーク旧市街（城壁内）マップ

写真 11　　York Minster

（左）正面[西側]、（右上）南側、（右下）聖堂内部_入口付近

16 世紀には、ヨーク・ミンスターは略奪破壊行為の被害を受けるが、19 世紀までにはステンドグラスや祭壇などが修復された。注目は複数のステンドグラスで、東壁にあるものは天地創造・世界の終わりをモチーフにしており、世界最大級のステンドグラスとの声もあがる。かまぼこ型をしたヴォルト様式の天井も有名である。大聖堂の塔の上に登ることもでき、275 段の階段の先にはヨークの街並みを一望できる。また、クリプトと呼ばれる地下聖堂は博物館になっており、ヨーク・ミンスターの歴史で最も古い部分である。この場所は古代ローマ時代の要塞や 11 世紀のノルマン様式の聖堂があった場所であった。

・National Railway Museum（写真 12）

国立鉄道博物館は、200 年以上にわたるイギリス鉄史を学ぶことができる。展示物には蒸気機関車、王室専用車、そして日本の初代新幹線 0 系など、鉄道車両 100 両ほどが展示されており、このほとんどがかつて実際に運行していたものである。図 5 は館内マップであるが、メインエントランスを入ると MAP や当日のイベント情報の冊子を受け取れる。館内の展示スペースは、Great Hall、Station Hall、North Shed、South

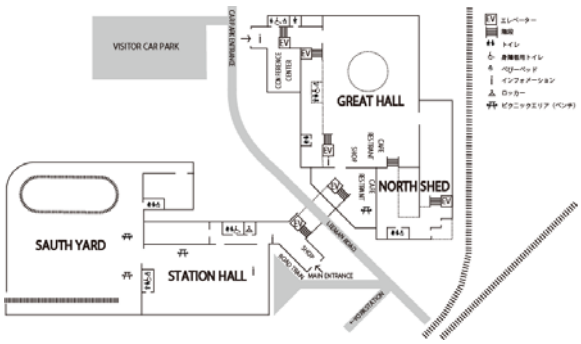


図 5　館内図（資料より筆者作成）

（ⅰ）博物館出入口

（ⅱ）作業所の様子

（ⅲ）GREAT HALL

（ⅳ）STATION HALL

写真 12　National Railway Museum

Yard の 4 つの空間に分けることができる。

Grate Hall では世界中から集められた車両が並ぶ。蒸気機関車の世界最速記録を打ち立てたマラード号、豪華車両のトパーズ、そして、新幹線も展示されている。新幹線の展示では車内座席に腰を下ろすことができるほか、車両前方の液晶モニターに新幹線を紹介する映像が流れている。また、車両周辺には制服や駅弁などの展示物がある。ホールの一角には小さい子供が楽しむためのプレイエリアや鉄道模型のスペースがあり、プレイエリアでは機関車トーマスの動く遊具が置かれていた。また、鉄道模型はガラス越しにじっと模型を見つめる子供や、はしゃぎ喜ぶ子供の姿をみた。その様子を見ている親も楽しそうであった。Grate Hall には大きなホール内を一望できる場所もある。世界のさまざまな鉄道車両が所狭しと並べられたその景色は圧巻であった。なお、Great Hall にはショップとカフェがある。壁などで仕切られていないので、鉄道車両を眺めながらゆっくりカフェメニューを楽しむことができる。当日はカフェ利用客が多く、ビールを片手に会話を弾ませている様子を見ることができた。

Station Hall は駅のプラットホームが再現されている雰囲気漂う展示となっている。歴史のある汽車の展示のほか、看板や電話機など汽車以外の展示にも工夫が凝らされているインスタ映えする空間である。また、ホームにはカフェがあり、汽車のレトロなソファーに腰掛けてカフェや軽食を楽しむことができる。筆者もランチ（ヨークシャー・ティーとイングリッシュ・マフィンのセット）をここでいただいた。

South Yard は Station Hall の奥にある。週末にはミニチュアの鉄道が運行しており乗車できる（10:30～15:00）が、当日はあいにくの雨で中止となった。料金は一人 1 回£3 であり、2 人目は無料となっている。

North Shed は、車両の修理場や 1 万点を超える鉄道に関する物品の保管室がある。鉄道技術者が車両を修理・修復している様子を見ることができるようになっとり、また、保管室も自由に見学することができる。また、North Shed を置くまで進むとヨーク駅が（裏手ではあるが）目の前にあり、電車が行き交う様子を眺めみることができる。North Shed は作業場の油の匂いや作業の音も楽しむことができた。

国立鉄道博物館は入館無料である。今回は時間がなかったため 1 時間半ほどしか滞在できなかったが、半日は楽しめる場所である。

・City Walls（写真 13）

ヨークの特徴のひとつに城壁があげられる。現在の城壁は 12 世紀～14 世紀にかけて造られ、19 世紀以降復元された箇所もある。もとともはローマ時代（AD71 年頃）にローマ人によって建設されたとされる城壁は現在よりも小さかったようだ。現存する多くがノルマン人によって築かれたもので、中世の城壁ではイング

写真 13　City Walls
（左：ブーザム・バー、右：城壁の上）

ランドで最も長いものである。城壁の扉を閉めるために使われた横木を“Bar”と呼んだことから、城門は「バー」と呼ばれるようになった。主要な門は4箇所ある。南にあるミクルゲート・バーはロンドンからの終着点で、ヨークの正面玄関としての役目を持ち、ここには処刑された罪人の首が並べられたと言われる。

城壁は駅を出てすぐに目にすることができる。街のいたるところに遺された城壁は、城門にある階段から上れるようになっており、ほぼ一周の城壁散歩が楽しめるようになっている。Visit York によると、城壁の距離は 3.4km ほどで、一周 2 時間程である。毎年、250 万人もの人々が城壁の上からの眺望を楽しんでいるとのことである。

・Shambles（写真 14）

シャンブルズ通りの両側には木骨造りの店が並ぶ。1086 年に征服王ウィリアムの検地台帳に記載された、現存する唯一の通りである。建物は上の階に行くほど前に突き出しているのが特徴である。これは、昔、この通りが肉屋通りであり、突き出した軒下に肉をつり下げていた。肉を長持ちさせるためにわざと日当たりを悪くした。また、加工時出る肉の不要物（血など）を路地から流すためでもあった。通りの名は、肉が陳列された屋台やベンチを意味する Shamel に由来する。現在の通りの姿は 1400 年ころに再建されたものであり、今は美術品や工芸品を売る店が多く入っている

なお、この通りは、『ハリー・ポッターと賢者の石』の映画で登場する、ダイアゴン横丁のモデルとなったと言われている。2000 年の映画の公開後、ハリー・ポッター好きが集まる聖地巡礼地にもなっている。

2-3　その他

ヨークは観光地ツアーの種類が多い。人気が高いのがゴースト・ツアー。街は 2000 年の歴史があるため、怪談や妖奇スポットも多い。筆者も 2 時間の GUIDED WALKING TOURE に参加するため行ったが、あらかじめ調べていた情報が古かったのか、時間や集合場所が変更になっており、参加が叶わなかった。その代わりインフォメーションでは親切に案内していただいた。

写真 14　Shambles

３．BATH～傾斜と建物から作られた優美な街並み～

3-1　バースについて

ローマ人が大浴場を築き、英語の“BATH（風呂）”の語源とも言われるのがバースの街である。18 世紀に建設されたジョージアン様式の建物には、この地域で採れるハチミツ色（薄黄色）の石材が使われ、優雅さと優しい色調で統一された街並みをつくりだしている。町全体が貴重な遺産であり、保護の対象となる建造物は約 5 万にのぼる。

バースには古くから温泉にまつわる伝説がある。

『紀元前 860 年頃、病を患ったケルト民族の王子ブラダッドは宮廷を追放され、エーヴォン河畔に落ち延びた。豚飼いに身をやつした王子はある日、豚たちを追い払って沼に入った。すると傷や腫物はすっかり消え、病も癒えた。喜んだ王子はここに街を築いたとされる（週刊ユネスコ、世界遺産 No.70）』

ローマ軍の侵略はBC60～70年ころとされているが、エヴァン河沿いに広がる肥沃な土地と豊かに湧き出る温泉のあるバースには占領したローマ人が多く住み着いた。ローマ人はここに壮大な神殿、浴場、劇場などを建立する。全長約 1600m の 4 つの門が設けられた市壁でほぼ正方形に取り囲まれたこの地を、「アクア・スリス（女神スルの水）」と呼んだ。鉛で囲んで造った貯水池は祭祀の中心とされた。しかし、5 世紀ころにローマ人が去ると、サクソン族の侵入と破壊によりローマ人の建設した浴場は廃墟と化した。中世都市バースは衰退したが、毛織物業や温泉医療の場として活況を維持し続けた。

バースが生まれ変わるのは 17 世紀末である。18 世紀初めには飲泉の設備を備えたポンプ・ルームがリチャード・ナッシュによって開かれ、上流階級の人々がバースに訪れるようになる。保養地として絶大な人気を誇るようになった。現在のバースの街並みは、18 世紀にジョン・ウッド親子により手掛けられた。設計した正方形、円形、半円形など様々な形の建物や広場が連続する、流れるような美しい街並みは、見事に自然と都市が調和している。また、斜面という自然の地形を活かした設計も見事である。バースの街は、イギリスでは都市デザインの模範と言われている。第 2 次大戦で歴史的建造物が破壊されたものの、全て再建され、1987 年、ユネスコの世界遺産に登録された。

ローマ時代に温泉の街として栄えたバースは、18 世紀には上流階級が集う高級リゾート地として再び脚光を浴び、以降、多くの有名人、著名人、そして、観光客が訪れる一大観光都市となっている。ロンドンから電車で 1 時間 30 分ほどで、バース・スパ駅から中心

図 6　　バース市街地マップ

部まで徒歩 5 分ほどとアクセス性も申し分ない。また、電車で 15 分ほどでブリストルに到着する。（図 6）

3-2　代表的な観光施設

・Abbey Church Yard 周辺（写真 15）

アビー・チャーチ・ヤード周辺には、ローマ浴場、パンプ・ルーム、バース寺院など、観光都市バースを代表する施設が集る。近くにはインフォメーション・センターもある。バース・スパ駅からヤードに向かう道路は分かりやすく、またヤード周辺は歩行者専用空間が広がっており、安心して歩くことができる。人通りは非常に多く賑わっている。

ローマ浴場は紀元前 1 世紀ごろにローマ人によって建てられた大浴場で、再考の保存状態を保っている。浴場内には当時では珍しいプールもついていた。現在は博物館になっており、発掘された古代の彫刻やモザイクなどが展示されている。濃い青緑色の温泉はミネラルを含む鉱泉水である。ローマ浴場の入り口にはパンプ・ルームがある。現在はレストランとなっているが、1706 年に鉱泉水を飲む設備を備えた社交場として建設され、1790 年に現在のジョージアン様式の建物に改築された。バース寺院は 676 年に修道院として創建され、973 年にイングランドを統一したウェセックスのエドガー王の戴冠式も行われた歴史的にも重要な教会である。1090 年にロマネスク様式の大聖堂に建て替えられ、現在は 1499 年のチューダー様式の建物が主となっている。建材にはバース・ストーンが使われており、ハチミツ色の優しい風合いであり、石造り独特の硬さは感じられない。内装も美しく、床から垂直に伸びた柱から扇状に曲線を広げたパーペンディキュラー様式の天井が魅力的である。ステンドグラスの窓が多いのも特徴であり、色彩も鮮やかで明るい雰囲気の内部となっている。現在は寺院側面が修復中である。

・No.1 Royal Crescent and The Circus（写真 16～18）

バースの街並みの改造に大きく貢献したのが、バース出身の建築家ジョン・ウッドと事業家ラルフ・アレンである。ジョン・ウッドはイギリスで流行していた、古典、バロック、ルネサンスの各様式を融合したジョージアン様式の建物で街をつくることを計画した。アレンはバース南東にあった石炭石（バース・ストーン）に着目し、建築用石材の事業を思いついた。当初、建築向きではないとされていた石材を自らの邸宅に使い、その優秀性を実証した。その後、本格的に建設事業に着手することになる。ジョン・ウッドは長年構想を練っていた円形の広場を持つ集合住宅、“サーカス” の建設を始める。しかし、着工直後に死去し、その遺志は息子に引き継がれることとなった。20 年をかけて建設されており、古代ローマ建築とストーンヘンジに影響を受けて設計された。数あるジョージアン様式の建物の中で最高傑作とされるのは、息子が手掛けたロイヤ

写真 15　アビー・チャーチ・ヤード周辺
（左：パンプ・ルーム正面、右：バース寺院正面）

写真 16　ロイヤル・クレセント

写真 17　ザ・サーカス

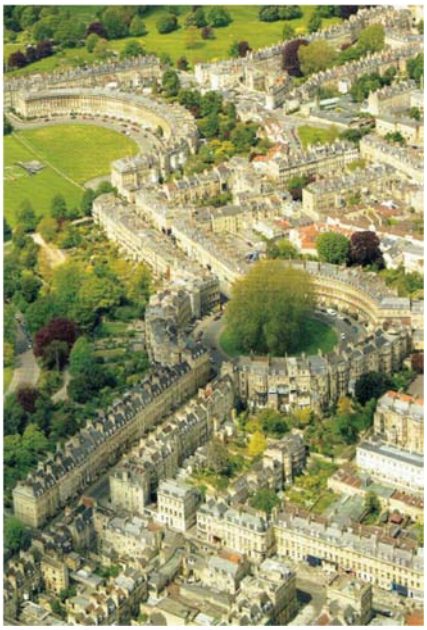


写真 18　ザ・サーカスとロイヤル・クレセントの鳥瞰（筆者が購入したはがきより）

ル・クレセントである（1775 年完成）。114 本のイオニア式の円柱で飾られた三日月状に円弧を描く集合住宅で、長さは 180m に及ぶ。内部は皆同じ造りである。

・Pulteney Bridge

エイボン川に架かる石造りの三連の優雅なアーチ橋である。1774 年にバース開発の功労者の一人「ウイリアム・バルトニー」の依頼で、建てられた橋である。フィレンツェのベッキオ橋を参考にしたともいわれており、橋の両側にはショップが軒を連ねている。

3-3　バース建築博物館の展示「バースのまちづくり」

地方の小さな町が「都市デザインの模範」と言われるようになったのには、18 世紀の建築家や職人たちが中世の城壁に囲まれた町をジョージ朝様式の建物に変え、貴族や上流社会の人々が集う街を建造したことによる。とくに、後述する、建築家ジョン・ウッド親子の建築設計は、街並みに曲線美というアクセントをつくり、街全体を鳥瞰したときにも美しさを感じることができる。ここでは、バース建築博物館に立ち寄った際に得た情報を中心に、人々を魅了させているバースのまちづくりについて紹介をする。

まず、バース建築博物館（写真 19）はバース観光の中心地（バース寺院）から徒歩約 10 分ほどの位置にある。バースは丘陵地に造られた街であり、博物館は坂道を上った先にある。博物館は 18 世紀のゴシック様式のチャペルを利用し、展示が行われている。室内にはパイプオルガンが残されている。展示物として、1 : 500 スケールの都市模型（写真 20）は見逃せない。また、建築博物館だけあって、建築模型を使った工法の説明、石の採掘、装飾品、修復技術を紹介した展示も多くある。受付を通ると、まず、約 5 分間のバース

写真 19　バース建築博物館入口

写真 20　バース建築博物館内部
（左上 : 室内展示、右上 : ガイド、下 : 市街地模型展示）

写真 21　市街地の変化（左 : 1694 年、右 : 1800 年）

写真 22　ﾗﾝｽﾞﾀﾞｳﾝ・ﾛｰﾄﾞからｴｲﾎﾞﾝ川までの区間

の紹介ビデオを見るように言われ、これを見終わったら自由に見学できる。見学者は筆者ひとりであった。

写真 21 の左図は Joseph Gilmores によって描かれた 1694 年の地図である。バースが中世の城壁に囲まれ、城壁の周辺には宿屋が立ち並んでいる。当時の人口は 3,000 人程度であった。右図は、1800 年の地図である。城壁は無くなり、市街地が拡大している。18 世紀の都市計画では広幅員の街路沿いをテラスハウスが

連なる。また、ロイヤル・クレセントやサーカスも描かれている。当時の都市収容人口は30,000人であり、約100年の間に都市は劇的な変化をしている。

丘陵の地形は次々と課題が生じる。バースの街は川がループした位置にある。中世の街は台地の上に建てられたものであり1700年までは大きな変化はなかったが、産業革命とこれによる都市化により市街地を拡大していく。この傾斜地に平らな地面を造り出すためには多くの作業が必要であった。しかし、バースの地盤は弱く、石灰石の瓦礫が堅い岩盤の上に乗っている状態であったことから、頻繁に地滑りが発生した。そこで活躍したのが建築職人であった。職人たちの配慮や工夫が、今のバースの都市景観につながる。バースの成長に従い、ランズダウンの斜面に位置する「アッパータウン」は丘の上の地として、眺望、きれいな空気、そして優雅な建築物として有名になった。

3-4　その他

旧市街地はバース・スパ駅の北に広がる。駅を出てすぐ東にはバスステーションがある。中心部に向かう途中には2009年にオープンしたSouth Gate Bathがある。バース保護地区と世界遺産地域内に造られた商業を中心とした複合開発地区である。この地区は3期を経て建設されている。まず、商業ユニットが完成し、次に、デバート、そして、ショップ、レストラン、カフェが完成した。2010年にはバース駅のリニューアルも含め、全ての工事が完了した。現在、約50店のショップ、22のレストランに加え、地下には876台収容の駐車場がある。また、当エリアには99件のアパートメントがある。これらが6つのブロックに配され、ジョージアン様式の建物と現代的なパブリック・スペースの新旧が融合する空間となっている。

バース市街地の外延部には自然が広がる。この強みを活かし、さまざまなツアーが用意されている。旧市街地を望むなら、エイボン川東のBathwick Fildsからが良い。3マイル（4.75km、1時間半）のウォーキングコース、その倍、6マイル（9.6km、3～4時間）の市街地郊外を行くスカイライン・ウォークもある。

おわりに

研修ではとっさの判断と柔軟性を試されることが多かった。時間、交通手段、急変する天気への対応…。初めは、計画通りに…と思っていたがそうもいかなくなる事態が往々にあった。信号を渡るのでさえも、初めは律儀に守っていたが、英国の歩行者信号は点灯時間が短い。そしてなかなか変わらない。いろいろな場面で日本との違いを確認できた。あっという間に帰国の日を迎え、もっと居たかったというのが本音である。次回は今回の経験と反省を活かした、渡英としたい。

謝辞

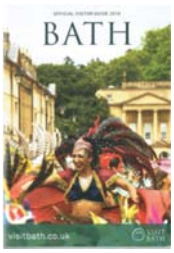
今回の海外研修は自由に動くことができた。大きなトラブルもなくぶらり調査を楽しめたのも、ひとえに同行したメンバーのお陰である。かって参加したIREの研修を思い出しながらの旅ができた。団長の宮本さん、加藤先生、三輪先生ご夫妻、谷口さん、西谷さんには、ここに感謝の意を記します。

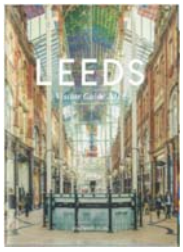
注釈

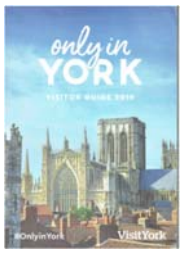
(注1) 新高速鉄道として既に「High Speed One (HS1)」が整備されている。ロンドンのセント・パンクラス駅からケント州、英仏海峡トンネルの英国側出口までを結ぶ全長109キロメートルの高速鉄道用線路。2007年11月開通。時速300キロメートルまでの鉄道に対応する。現在、HS1を利用している鉄道は、ユーロスターのほか、ロンドンとケント州を結ぶサウスイースタン鉄道の列車、及び貨物線である。HS1の沿線上の駅には、ストラットフォード・インターナショナル駅、アシュフォード・インターナショナル駅などがある。新鉄道は「High Speed 2」を略した「HS2」との通称で呼ばれている。計画は2段階にわたって実行され、今回は、第1段階であるロンドン–バーミンガム間の鉄道建設が承認された。第1段階の工事は2017年までに開始され、2026年に開通の予定である。最高時速は約400キロで、ロンドン–バーミンガム間をわずか45分で移動できるようになる。また、ロンドン西部のオールド・オーク・コモン（Old Oak Common）に新たに建設される駅から、現在建設中のロンドン横断鉄道「クロスレール」に乗り換えることが可能。更に、高速鉄道用線路「HS1」とも接続し、欧州への足が更に便利になる。第2段階の路線は、イースト・ミッドランズ、サウス・ヨークシャーにも停車し、またヒースロー空港行きの支線も建設される。更には、リバプール、エディンバラ、グラスゴーなどへ行く既存の鉄道とも接続する。今後も反対意見は聞かれるだろうが、HS2が、英国の公共交通サービスを飛躍的に発展させ、国内の移動が更に便利になることは間違いなさそうである。

参考・出典

beoイギリス留学：ヨーク都市情報,
https://www.beo.jp/guide/city/york.html
NewsDigest：英国ニュースダイジェスト,
http://www.news-digest.co.uk/news/news/in-depth/8509-high-speed-rail-hs2.html, 2012.9.26.
Leeds City Council：LEES CITY CENTER VISION,
https://leedscitycentrevision.co.uk/home/about-leeds
RAILWAY MUSEUM：MAP.
ロンドン留学センター：LEEDS,
https://www.london-ryugaku.com/leeds/
週刊ユネスコ：世界遺産NO.70、講談社、2002.
Visitbath：BATH Official Visitor Guide 2019.
Visitleeds：LEEDS Visitor Guide 2019.
VisitYork：Only in YORK Visitor Guide 2019.







リバプールのバスはしゃべらない！

NPOREF 交通分科会　三輪裕一

特定非営利活動法人福井地域環境研究会（ＮＰＯＲＥＦ）の２０１９年度海外研修でイングランドに行く機会を持つことができました。ここでは、その中のｏｎｅシーン＝Liverpool（以下 Liv と略称）で路線バスに乗った体験＝を、日本のそれ、特に福井市内の京福バスとの比較のうえで考えてみたいと思います。あくまで一個人の感想ですので、主観性が強いことをお許し下さい。

Liv には昨年度 UEFA Champions League で優勝したサッカークラブ Liverpool FC があります。監督はドイツ人の Jürgen Klopp、愚息が Premier League のファンなので、私も衛星放送などでよく観戦しています。今回の Liv 滞在は水曜日と木曜日で、週末に開催されるリーグ戦の試合はありません。しかし折角 Liv に来たからには、ビートルズ（宮本社長ごひいき）より Anfield（Liverpool FC のホームスタディアム）は当然のことと、Albert-Dock をキャンセルして Anfield に向かうことにしました。家内同伴です。

Ｎｅｔで行き方を検索し、Queen Square のバスセンターで一日フリー乗車券を購入（プラスチックのきれいなプリペイドカード）６番乗り場から１７番のバスに乗りました。「前乗り先払い」これがミソだと後からわかりました。乗客の大半はカード払いで現金払いはほとんど見られません。運転手席に備え付けのカードリーダーにタッチして乗車します。Ｎｅｔのガイドでは、「巨大なスタジアムが見えたら下車すれば良い」とあります、家内とあれこれガイドブックをめくっていると、後方座席に座っていた朝から一杯機嫌のジェントルマンが「Anfield へ行くんだろ、スタディアムが見えたら、おれがボタンを押してやるよ、まあ、みんな降りるからわかるけどね」というようなことを、Liv にしては訛りの少ない英語で教えてくれました。ジェントルマンにサンキューをいって下車、スタディアムツアーとオフィシャルショップでの買い物を堪能し、帰りもバスです。今度は簡単、ホテル（Holiday Inn）のそばで下車しました。

次は、夕食までの時間を利用して大聖堂へ行くことにしました。徒歩でも行けるということでしたが、バスに乗れることがわかった（これが大間違い）ので再びバスを利用することにします。Liv は丘の街、坂が多いので歩くと疲れるのです。家内がバスセンターのインフォメーションで行き方を聞いてきました。２番乗り場から７４番に乗れば良いそうです。７４番の二階建てバスに乗ります。大聖堂が見えるように二階座席に座りました。バスは坂を上り、大学の構内を通って授業後の学生を乗せ、坂を下ります。「あれ！大聖堂が見えないじゃないか、え？どこで降りるの？」家内とあれこれ相談しているうちにバスはどんどん郊外へ向かいます。「こりゃいけん！（広島弁）」とあわててボタンを押して郊外の停留所で下車しました。道路を横断して反対側のバス停へ、路線図はどこを捜してもありません。時刻表は日本と同じように掲示してありました。

少し待つと向こうから今度は二階建てでなく普通のバスが来ました。やれやれ！私たちの前にロシア人の親娘が（ポーランドかな？）乗り込みます、ここで「アイヤー！」と納得しました。先払いですから、料金を払うときに、運転手に目的地を告げるのです、すると運転手が料金を言ってくれ、そのバス停で停車してくれるのでした。ロシア人の親娘は現金を料金箱に入れて乗り込みました。私たちはフリー乗車カードなので、何も言わなくても、運転手は目的地を聞かなかったのです。

おわかりですか？バス内には Next Stop の掲示もなければアナウンスもないのです。しかもこのバスには後部ドアがありません。

ここで遅まきながら気づきました。京福バスでは、後ろ乗り整理券後払いです。車内に料金の電光掲示板があり､距離によって変わっていきます。先日、掲示板の料金の変化に気づかず、降車するとき、運転手に「お客さん、料金表よく見て下さい。」と嫌みを言われ、一日中不快な気分になりました。アナウンスは親切で、通過するバス停でも「運動公園南門通過します」と運転手のアナウンスがあります。終点福井駅では「お忘れ物にご注意」どころか「環境保護にご協力ありがとうございました」です。路線バスに乗ることが環境保護になるのかは疑問ですが、それはとにかく、かゆいところに手が届くような親切なアナウンスに慣れている日本人には、Liv の路線バスのシステムは合理的だと感心させられる一方で、なんだか違和感を感じさせられてしまいました。

さて、Central station の停留所に着きました。終点は乗車した Queen Square だと思い込んでいますから、他のお客さんが降りても座っていました。するとバスは発車せず、運転手がこちらを振り返って Liv 英語で何か言ってます。やっと「ｌａｓｔ」が聞き取れました。「あ、そうか！ここが終点なのね」と納得し「ｓｏｒｒｙ、ｓｏｒｒｙ」と謝って降りようとすると、運転手がにやりと笑って「ａｒｉｇａｔｏｇｏｚａｉｍａｓｕ」です。一日中さわやかに楽しい気持ちで過ごすことができました。路線バスの運転手は、どこでも不足しています。なり手がないのも分かります。運転以外の負担が大きく、神経をすり減らす大変な仕事です。少しでも精神的な不安をなくすために、Liv システムを考えてみてはどうでしょうか。この Liv の路線バスの運転手だけでは、何のデータにもなりません、たまたまだっただけかも知れませんが、この運転手さんのような精神的余裕が日本のバスの運転手にあるでしょうか。

路線バスの利用者はどこでもほぼ常連客（定期券ｏｒ回数券）で、私たちのような「一見さん」は少数です。地下鉄やインターシティ列車のような不特定多数の乗客を相手にする公共交通機関とは違います。その点では、わが「えち鉄」も同じでしょう。常連客は無賃乗車などしません。将来は「えち鉄」が信用乗車に踏み切ることを期待しているのですが・・。自動改札、ｓｕｉｃａ、ｐａｓｍｏなどに設備投資するほど愚かではないでしょうね。

話が横道にそれました。終点で下車した後、改めて大聖堂へ徒歩で出かけ、そばの停留所から Queen Square 行きのバスに乗って帰ってきました。それでも、「この停留所は Donot use だよ」とか「Tourbus only だよ」と小さく書いてあるだけで、停留所のポールと看板は、全く同じなので、ぼんやりしていると、「来ないバス」を待ってしまうという悲劇に遭うことになります。

帰りのバスの車窓から清潔そうな中華料理店をみつけたので、その日の夕食は、その店で、みんなで「火鍋」をいただきました。楽しい一日でした。

最後に蛇足ながら付け加えておきます。「加藤理事長、日本では赤信号で横断してはいけませんよ！イングランドとは違うのですから」

市内バス（後部扉はありません）

［NPOREF 海外研修 2019 参加記録］

初めてのUK４都市めぐり

～ マンチェスター・チェスター・リバプール・ロンドン ～

三 輪　加 奈 枝

REF の海外研修に参加するのは 2 回目である。３０年近く前に参加した「北京・天津の旅」があまりにも印象的で忘れられず、今回も夫に同行する形で部外者ながら参加させていただいた。

公共交通機関に乗ってみたり、街の中を自分の足で歩いたり、土地の食べ物の匂いをかいだり、人と話したりする。訪れた街を知るためにはそういったことが大切であることが、前回の旅でよく分かった。

〇各都市の公共交通機関は？　〇食事がまずいのは本当？　〇本場のアフタヌーンティーは？
〇パブ文化は？　〇サッカーの聖地巡りをして自慢しよう・・！〇UK に行くのは初めてだけど、英語の訛りがすごいって本当かな？

上記のような、私の興味関心を満たすことのできた今回の旅は、前回同様、忘れられない有意義なものになった。しっかりリサーチしていったわけではないので、あくまで私見になってしまうが４都市で出会ったことや感想などを、特に印象的だったことに絞ってざっくりまとめておきたい。

１．マンチェスター

現在、マンチェスターの中心部は工事をしている所が多く雑然としている。また、道端やトラムの駅にも浮浪者のような人が結構多く、さらに季節がら滞在した 2 日間がほとんど雨だったので、この街に対してやや暗いイメージを持ってしまった。

しかし、世界で最も美しい図書館と言われるジョン・ライランズ図書館があったり、かの有名なマンチェスターユナイテッドＦＣのスタジアムがあったり、興味深い街だった。

（１）Manchester Metrolink

マンチェスターには私の大好きなトラムが走っている。一日券を買っておけば乗り放題。街並みを見ることができて、もし乗り間違っても降りて逆方向に乗りなおせばたいてい何とかなる。街中は一区間の距離が短く、路線図も分かり易い。トラム最高！ホテルのすぐそばにピカデリーガーデンズ駅があり、マンチェスターユナイテッドＦＣのスタジアムがある聖地オールドトラフォード駅にも乗り換え無しで 15 分程度で行けた。かなり郊外にある駅だが、当然ゲームがある時には物凄い人になるので、広いホームになっていた。ここか

らスタジアムまではまっすぐの道を約 10 分歩く。周りは古い住宅地。ゲームのない日に歩くと寂しげな地区だった。

左の写真は中心部にあるエクスチェンジスクエア駅である。どの駅もこのようなデザインで、表示も見やすく便利だった。車両の色も駅のデザインも黄色でスタイリッシュである。雨が多く暗い街にはこの色は大変いいと思う。

私の好きなベルリンのトラムも、ドレスデンのトラムもベースの色が黄色である。そして福井のキーボ君も・・。冬場に日照時間が短い都市にはこの色がいい。そう思って調べたら、北欧のトラムはブルー系が多かった。・・寒い！まあ青空の色とも言えるが。トラムは街の顔になるから、色やデザインは重要だし、街の人に愛され誇れるものでありたい。

（２）街のシンボル“Worker Bee”働きバチ

街の中を歩いているとやたらとハチのマークが目に付く。街路樹の植えられた大きな植木鉢やごみ箱、灰皿のスタンドや車止めのポールなどに、デザインされた同じハチの浮彫があり統一感がある。

第一次産業革命時に勤勉に働いていた市民を称え、1842 年に働きバチを街のシンボルに制定したらしい。街の紋章にもハチが描かれている。日本のゆるキャラとはレベルも歴史も違う、格調高いシンボルだった。

“Worker Bee”をモチーフにした作品を展示している場所があったり、イベントも開催されているとのことだった。

そして、ボーッとトラムを待っていたら、こんな可愛らしい道路清掃車がやってきた。側面に大きくハチが描かれていて、車両全体のつくりもハチらしくなっていた。雨の中、ブラシを回しながら道路清掃に励んでいた。なんか応援したくなるデザインだった。

２．チェスター

この旅に来るまで、チェスターという街の存在を全く知らなかった。イギリス国内において最良の状態で現存する城郭都市の一つであり、リバプールからは電車で 50 分弱で行けた。

街の周りを取り囲む城壁の上を歩くことができるし、こじんまりしたチューダー様式の街並みは魅力的で、すべて徒歩で回ることができる。

街のシンボルともいえるイーストゲート・クロックは、イギリスではビッグ・ベンについで有名な時計塔らしい。

この街はもう一度時間をかけて行ってみたいと思わせる街であり、ここでもいくつかの興味深い出会いがあった。

（１）THE YORK ROAST co.で働くお姉さん二人

店のウインドウから見えた巨大なハムにつられてお店に入った。一人のお姉さんは手際よく大きなハムやローストポークから、客の注文にあわせて肉を薄く切り取り、量り、どんどんパンに挟んでくれる。

もう一人がレジでお会計をしてくれる。店は繁盛していてとても忙しい。お姉さんたちはニコニコしたり愛想をふりまいたりしている暇はない。近郊から運んでくるいい豚肉を使ったハムを提供している風だが聞くにも聞けず・・。そして何枚も重なった塩味が薄味でちょうどいいハムの下に入れてくれたものは果たして何なのか？？たぶんレバーペースト的なものなのだろう。そして、このパンの上のトッピングは？？カリカリして香ばしい。たぶん豚の皮の部分の唐揚げか・・。イギリスにも美味しいものはあった。そして“ヨークシャープディング”である。名前だけは知っていたが、シュークリームの皮をつぶしたような本物

をここで見た。プディングというとどうしてもプリン的なものを想像してしまう。ローストビーフの付け合わせにして、グレービーソースをかけて肉とともに食べる。

今日もチェスターのあの店は多分大忙しだろう。あのお姉さんはひたすら手際よく肉をナイフで切り取っているんだろうなあ。ちょっと不機嫌な子豚ちゃんのようなお姉さんだった。

（２）THE BREWERY TAP

このパブは、日本に帰ってきてからウェブなどを再チェックし、ビールしか飲まなかったけど食べ物も頼めば良かったと思った店だ。かなり美味

しいらしい！先ほどの店でボリューム満点のハムサンドを食べた後だったのでもうおなか一杯だったせいもある。

しかも、ビールの“エール”と“ラガー”の違いすら知らずにいたのはまずい！これはまた行くしかない。醸造所があり、直営のパブ“TAP”は２店舗ある。

建物も由緒正しく、ジェイムズ１世時代様式の木組み建築ということだ。内装もまさにその雰囲気で、漆喰を塗る前の古い壁も一部アクリル板でカバーして保存されていた。観光客はいなくて、地元のご常連さんらしきおじさん達が語り合いながらビールを飲んでいた。

（３）君たちは博物館帰りかな？

街歩きをしていると色々なことに出会って面白い。歩いていると、どこからか戦場での時の声のような雄たけびが聞こえ、ちょっと驚いた。

先生に引率された小学生諸君が、横断歩道の手前で“勝利をわれらに！エイエイオー！”的な感じで叫んでいたのだ。音頭をとっているのはまさに中世の兵士のような衣装の方であった。（博物館の人かなあ？）近くにグロズヴェナー博物館があるので、勉強に行った帰りかもしれない。子供たちはみんな盾を持っていた。兵士になりきっている子もいれば、ちょっと冷めている子もいたが・・。

（４）チェスター大聖堂で

ここでは、１ポンド寄付してブロックをひとつもらい、レゴブロックで大聖堂を作るのに参加できるというイベントをやっていた。もちろんやりましたよ！この中に私がポチッとしたブロックがひとつ。それがチェスターにあるというだけで嬉しくなる。大聖堂が身近に感じられる。（単純！）どうせなら 10 ポンド寄付して 10 ポチッとすれば良かった。

そして、この受付のジェントルマンに日本人かと聞かれ、そうだと答えると、“どの島から来たの？”と聞かれた。どの島って日本だけど・・と戸惑っていると、“四国？九州？”とさらに聞かれた。

“本州だよ”と答えると一番大きな島だねと言われた。おじさん日本に詳しい。私も島国に住んで

いるという自覚はあったが、日頃本州に住んでいるという意識はないなあとあらためて思った。UK も島国だがどんな感覚なのだろう。ちなみにこのおじさんの英語は訛りは全くなくて聞き取りやすい BBC 英語（Queen's English）だった。

３．リバプール

リバプールの英語はスカウスという。発音だけでなく全く単語が違っていたりする。話すのも早口。しかし、リバプールの人は一般的にフレンドリーである。

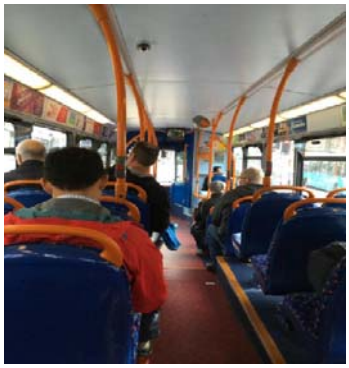
そもそもイギリスではそこら中で訛りがある。私たちが習った英語を話す人は人口のたった３パーセントらしい。（女王様たちとアナウンサーと、あと誰だろう？）しかも、実際行ってみると分かるが、移民の人も多いから外国訛りの英語も入れたらすごいことになる。

ただし、ホテルマンや観光客に接するような人は大体分かる発音をしてくれる。でもリバプールのホテルの朝食を食べるレストランの受付のおばさんは、毎朝にこやかに“タンキュー、バイ！（Thank you, bye!）”と送り出してくれた。

（１）いざ、リバプール FC のスタジアムへ

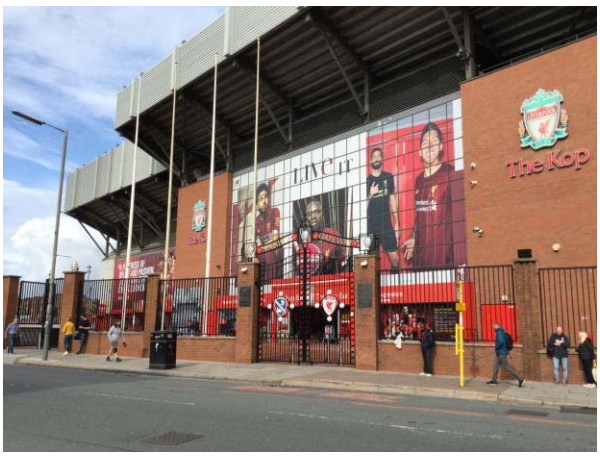
サッカーの聖地巡り第二弾はアンフィールドのリバプール FC スタジアムだ。

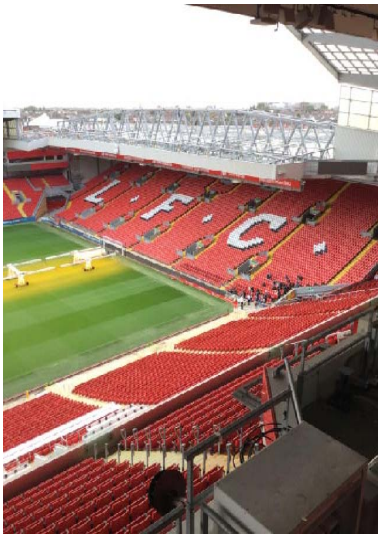
ホテルのすぐ裏にあるクイーンスクエアトラベルセンターでバスの１日券を購入。



何番のバスに乗るかは調べてあったので、元気に乗り込んだ。“海外の街でバスが使えたらプロだよね”と私たち夫婦は常々言っている。

今回も楽勝かと思いきや、何とバスの中には路線図もなければ、次に止まるバス停の表示もアナウンスも無い。信じられない・・。この件については夫がレポートを書いているのでそちらを参照していただきたい。ここではフレンドリーなおじさんに助けられ、無事アンフィールドに着いた。そもそもスタジアムの前がバス停だったから簡単だったのだが・・。





スタジアムツアーに参加した。さすがに広い。美しい。下に降りるとピッチが物凄く近い。憧れの選手がすぐそこにいる感じである。

ガイドの男性の英語は訛ってはいなかったがスピードが速いのと、つながり発音が多く 10%ぐらいしか聞き取れなかった。情けない。

スタジアムツアーの受付の可愛らしいお姉さんは日本語ができた。ずっと勉強しているけどまだまだダメですと言っていたが、そんなことはない。日本にはまだ来たことがないそうだ。彼女に聞いたところ、最近は日本人のお客さんより他の東南アジアのお客さんが多いらしい。この日のツアーも国際色豊かだったが、日本人は私たちだけだった。

（２）二階建てバスの二階に乗ってはダメ！

バスが使えたことで気をよくした私たちは、またトラベルセンターに戻り、カウンターで何番のバスに乗るかを聞いてリバプール大聖堂へ向かった。

STAND２で 79 のバスに乗る。二階建てバスが来たので嬉しそうに二階の先頭座席に陣取った。見晴らしもいいし、大聖堂の尖塔が見えたらブザーを押せばいいと思ったからだ。

これはバスの窓から写したものである。ライムストリート駅の近くを走っている。バスは二階建てが多い。リバプールはバスの路線が多く、走っているバスの数も大変多い。これは午後２時半ぐらいの写真だが道路はバスだらけだ。ホテルの窓からは朝夕バスで渋滞している様子も見られた。

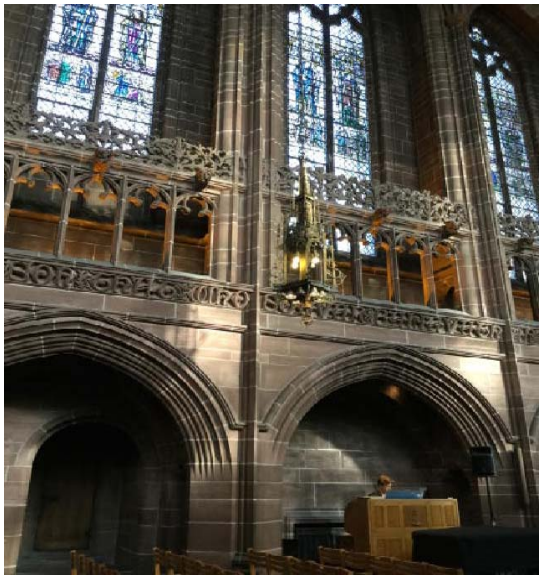
リバプール大聖堂は歩いてでもなんとか行ける距離なのだが、まったくそれらしきものが見えてこない。そうこうしているうちにリバプール大学の数多くの建物群も通り過ぎ、なんだか郊外へ来てしまった。まずい！とにかくどことも知れぬバス停で降りた。

向かい側のバス停で待つこと十数分、逆方向のバスに乗って街中に戻った。こんどこそ目を凝らして遠くにそれらしき大聖堂の塔を見つけて降りた。

バス停は目的地のすぐ目の前にあるとは限らない。リバプールでバスに乗る時は二階に乗ってはいけない。行き先が不安な時は一階の運転手さんのそばに陣取って初めから降りる所で教えてと頼んでおくしかない。まあおかげで、リバプール大学を見たり、大聖堂近くの閑静な住宅街も散策できた。

辿り着いた大聖堂はゴシック様式で巨大。国内最大級の英国国教の教会寺院だけのことはある。ステンドグラスも古典的なものから現代風のものまで様々あり、装飾もパイプオルガンも繊細で素晴しかった。

ただ、この夜はメインの聖堂でコンサートがあり、その準備でバタバタしていた。せっかく敬虔な祈りを捧げようと思っていたのに、ビートルズの名前をちょっともじった名前のバンドが大音響でリハーサルをしていた。



しかし大聖堂の中にはいくつか別の礼拝堂がある。その中のレディーチャペルに降りて行ってみるとそこではパイプオルガンが鳴り響いていた。聖母マリアのステンドグラスも手の込んだ装飾も繊細で、優しい雰囲気に包まれる。天使のような巻き毛の若者がパイプオルガンの練習をしていた。ずっとそこで光に包まれて聞いていたいと思わせる貴重な時間だった。

（３）なぜかリバプールで火鍋を食す

リバプールには 2 日間いたが、私たち夫婦は残念ながらビートルズ関係の所や港湾都市ならではの場所に行く時間がなかった。しかも晩御飯は“火鍋”。何故に・・・。さらにその店には火鍋を三人前注文して五人でシェアしてはいけないという掟があった。

日本人は疑問に思っても言わないしすぐ引き下がるから駄目だといつも英会話の先生に言われているので、ここでは丁寧に文句を言わないとなと思い、そんな沢山は食べられないとか他のメニューも食べたいからと頑張って言ってみた。complainer になる練習だ。

困ったお姉さんはついにもう一人の年上のお姉さんに SOS を出した。そしてやはり鉄の掟は崩れなかった。これ以上日中関係が悪くなるとまずいし、日本人のイメージが悪くなるのもまずいので、しかたなく五人前を五人で食べた。膨大な野菜と肉の量だった。みんなでひたすら食べた。辛いけどおいしかった。色々な薬味が良かった。そして締めに入れる麺のラインナップの中に何故か日本のインスタントラーメン出前一丁があった。（サッポロ一番だったかも。）

４．ロンドン

（１）ロンドンで underground に乗る

世界最古の地下鉄は subway ではなく、英語では underground という。愛称は Tube。まさに土管を地中に埋めてそこを電車が走っている感じである。狭い、暑い、構内も暑い。しかし便利。新しい駅もあるが、レトロな感じの駅が多い。

歩いて行けるような所でも駅を探してあえて地下鉄を使ったので、この日歩いた距離が 13 ㎞にもなってしまった。チェスターを徒歩で歩き回った日と変わらない。本末転倒では？憧れのアフタヌーンティーをする暇もなくよく歩いたので、日本に帰ったら体重が減っていた。

（２）デパート“リバティ・ロンドン”に行く

女子旅ではないがここだけは行きたかった。オックスフォードサーカス駅からすぐの老舗デパートである。日本でも“リバティプリント”の生地は有名だ。

建築も素晴らしい。地上５階、地下１階のチューダーリバイバル様式の建物で、床もギシギシ音が鳴るような木製だし、創業者が船から持ってきた木の階段もある。

そして入り口には、よくありがちなライオンではなく大きな狛犬がある。1875 年の創業時は日本やアジアから輸入した織物などを扱う店だったからだそうな。なるほど・・。

そしてせっかくだから“リバティプリント”のものをお土産に買おうとしてハタと困った。生地はここのものだけど、MADE IN JAPAN なのだ。日本の縫製技術が優れているから日本で作ってもらっているとのことだった。MADE IN JAPAN と書かれているものををお土産にしたくないなという気持ちもあるがこれはよくあるケースだ。

（３）ロンドンあれこれ

ロンドンといえばここと言われるような場所も押さえておこうということで歩き回ったが、テムズ川沿いの有名所は改修中の所が多かった。かの有名なビッグ・ベンも時計の顔だけ出してシートに覆われていた。

ウエストミンスター大聖堂とウエストミンスター寺院と二つ別のものがあったのねとか色々発見しながら街歩きをした。

世界的に有名な観光地はなぜかどこも同じ様相になるなあと今回しみじみ思った。東京の浅草も、ウイーンの中心部のシュテファン寺院のあたりもなんだか同じに思えるのが可笑しかった。そういう場所は人種のるつぼになるから、モノよりヒトを見てしまうからだろうと思う。

そして“大英博物館”はホテルのすぐそばにあったので行ってみた。入館料はタダである。モアイ像やエジプトの色々な像、有名なロゼッタストーンなど見るべき物は多い。ただ印象としては断捨離できない巨大な家のような感じだった。収集好きのじいちゃんが色々集めてしまって捨てるに捨てられず困ってる的なものも多く、誰も見ないような棚の下に放りこまれている気の毒な収蔵品も多かった。

バッキンガム宮殿へ行く途中に、行きたかったけど時間がなくてあきらめていた紅茶屋さんを偶然見つけた。ロンドンにいくつか支店があるうちのひとつだ。1886 年創業の“Whittard”である。中国系の店員さんが話しやすく、色々聞いて結構買い込んだ。なんと日本の抹茶や茶筅なども扱っている。ここのアールグレイは初めて飲んでみたが美味しかった。本当のベルガモットの皮のピールが入っている。日本でもお取り寄せができるが３倍以上の値段になってしまう。誰かロンドンへ行ったら買ってきてくださいね。

イギリスの食べ物はまずいのかという問題は、そんなにまずくないと言っておきたい。パブなどにある有名なフィッシュアンドチップスのような油で揚げる料理は、意外とどこでもカラッと揚がっていて脂っこくも生臭くもなかった。

ただし、ハムやソーセージなどの塩分はかなり強い。バターと小麦粉と砂糖と塩だけで作るショートブレッド(クッキーのようなもの)も、オーガニックのものなど色々買ってみたが塩分がきつかった。お土産に買ってきたけどボロボロに砕けてしまって人様にあげられないという悲劇も起こった。

（４）最後に

最後になりましたが、加藤先生はじめご同行の皆様、本当にお世話になりました。楽しく有意義な旅をありがとうございました。

英国の橋梁事情

NPOREF 交通分科会　宮本好昭

『まえがき』

ヨーロッパの構造物はアーチが基本構造形式であるように思われる。教会の天井、一般的な建物の開口部、小スパンの橋梁などの構造はアーチが基本となっている。アーチを構成する素材は、建築物などの荷重の小さい場合は木、レンガが用いられてる。さらに、橋梁のように大きな荷重を支えるアーチは石造となる。

イギリスにおいては、産業革命により鉄が生み出されるとこれを用いた鉄橋が実現する。

『アイアンブリッジ』

リバプールから南へ列車でシューズベリーへ、さらに駅から東へバスでアイアンブリッジ渓谷(コールブルックデール)へ向かう。渓谷は、セバーン川を挟み、鉱山、初期の溶鉱炉の燃料となる木材が豊富で、製鉄産業発祥の地となった。鉄鉱石、石炭などの鉱山、博物館、製鉄所跡等が点在する。

セバーン川渓谷の両岸の鉱山、製鉄所間の横断方法は、当初渡し舟であったが、より信頼性の高い横断方法として、橋梁の架設が必要とされた。こうして、1777 年着工、1779 年竣工の文字通り世界最古の鉄橋(スパン 30.63 メートルの鋳鉄製アーチ橋)、アイアンブリッジ(Iron Bridge)が架設された。当時、日本は江戸時代で、第 10 代将軍徳川家治の治世である。日本でこのような橋梁が出現するのは約 100 年後である。

アイアンブリッジ全景　(左岸下流より)

筆者撮影

(1) 景観

アイアンブリッジは、部材の製造、架設技術の制約からか、3 重、5 列のアーチで構成されている。内側のアーチのみ完全な円弧で外側の 2 アーチは両側に分かれた欠円となる独特のアーチ形状である。

中央部高欄　筆者撮影

最も外側のアーチと桁を繋ぐ小さなリング状の部材、両端部の 2 本の柱材と桁を繋ぐ逆チューリップ形状の部材は装飾的要素が強い。アーチクラウンは石造アーチのキーストーン(要石、楔石)を模している。最もシンボリックなのは、アーチ中央の高欄である。円中心に 1779 の刻印が誇らしげである。

(2) 構造

上路アーチ形式におけるアーチ部材は基本的に圧縮部材で、一般的に圧縮に強い石材が用いられてきた。現在ではこれに代わりコンクリートが用いられている。

アイアンブリッジに用いられた鉄は鋳鉄である。鋳鉄(cast iron)は、製鉄技術が初期の頃に造られた鉄で、現在、主流となっている鋼鉄に比べ炭素の含有量が多く、もろく、曲げ･引張に弱い鉄である。

鉄の種類と特性

		炭素含有量	硬度	展性(粘り)	融点
鋳鉄	cast iron	大	高	小	低
鋼鉄	steel	中	中	中	中
錬鉄	wrought iron	小	低	大	高

鋳造法は、現在多く用いられる金型でなく、砂型によるもので、独特の粗い肌触りは、塗装の上からでも見て取れる。

このような、鉄でスパン 30 メートルの鉄桁橋を架けた場合、現状の桁高(≒0.5 メートル)の 3 倍程度の鋼桁が必要になると考えられる。

次に、部材どうしの継手は、鉄の橋にとって重要な技術である。継ぎ手法は、リベットから高力ボルト、溶接継手へと変遷してきている。アイアンブリッジの建設当時は、これらの技術がなく、ほぞ継ぎ手(mortise and renon)、あり継ぎ手(blind dovetail)などの伝統的な木工技術を用いたようである(based on tradisional carpentry)。

あり継ぎ手は、塗装に隠されて確認できないがほぞ継ぎ手の一種、くさび止めほぞ継手(写真左)は確認できた。これは、よく見かけるもので、小学校などにある木製のいす(写真右)等の足元にある。

くさび止めほぞ継手

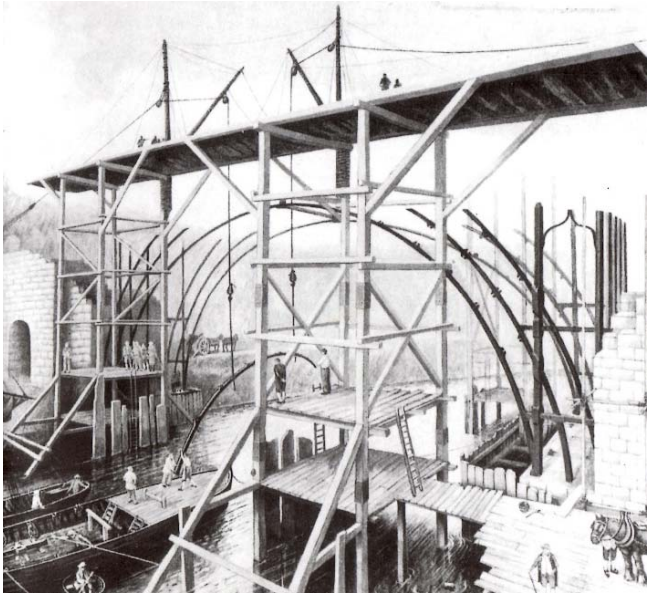
筆者撮影

Google 画像

(3) 架設

架設は、両岸に足場を組立て、繋ぎ合わされたアーチ部材を舟で運搬し、足場に据付けられたマストとジブ(ブーム)を組合わせた簡易な吊上げ装置を用いている。こうした、吊上げ装置は、昭和の中ごろまで現場のいたるところで見受けられた。ジェームス・ワットによる本格的な蒸気機関の開発が 1769 年と、アイアンブリッジ着工の 10 年前になるので、吊上げ動力は蒸気機関によっているかもしれない。あるいは、下図右下に馬がいるので、馬力を使ったことも想像できる。このような架設法では、ブームの旋回が必要となる。これは繊細な作業なので、人力に頼っていると想像される。

架設状況



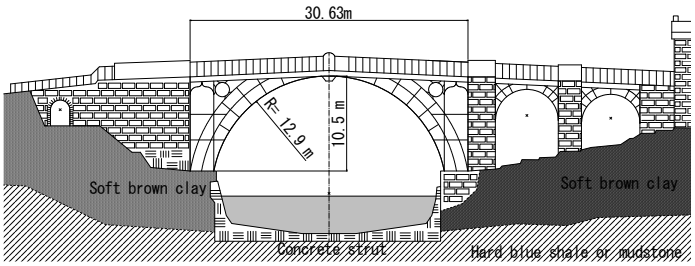
パンフレット「THE　IRON　BRIDGE ANF TOWN」より

(4) 維持管理

アイアンブリッジは、建設後 240 年経過している。この間、鋼橋の宿命である錆対策として何度も塗替えを繰返している。

記録によれば、1972 年に左岸側の橋台が内側に移動し、橋に圧縮力がかかりアーチ中央部を数センチメートル持ち上げた、とある。さらに、左岸側の橋台は、瓦礫、製鉄後に残った灰(furnace ash)からなる地盤上に造られたとあり、軟弱地盤上の橋台における側方移動であったと考えられる。この対策として、両橋台を繋ぐコンクリートストラット（つっかえ棒）を構築している。このストラットにより、橋台の側方移動を抑えたと考えられる。これは現在のアーチカルバート、トンネルなどの底面のインバートに通じる工法である。

側面図



パンフレット「THE　IRON　BRIDGE AND TOWN」より模写

あとがき

アイアンブリッジは幅員約 7 メートルで、現在は歩道橋として利用されている。左岸側は遊歩道が整備され、コンクリートアーチ橋をくぐり、鋳製アーチ橋の根元までたどり着ける。鋳鉄の肌触り、継ぎ手部のディテールを間近で見ること(近接目視)ができる。技術屋の興味を十分満足させるものである。

アイアンブリッジは、鉄橋としては品質上十分とはいえない材料と時代的に限定された技術で、当時としては画期的な長スパンを実現させたといえる。

また、景観上は、三層のスレンダーのアーチを中央に置き、両サイドに石積みの橋台･橋脚を配し、独特な存在感をアピールしている。また、細部の造作にも配慮されており、後世の評価にも十分、耐えうる橋である。さらに、二百数十年の長きにわたり、丁寧な維持管理を続けられ、建設当時の姿をそのまま残していることは驚きである。

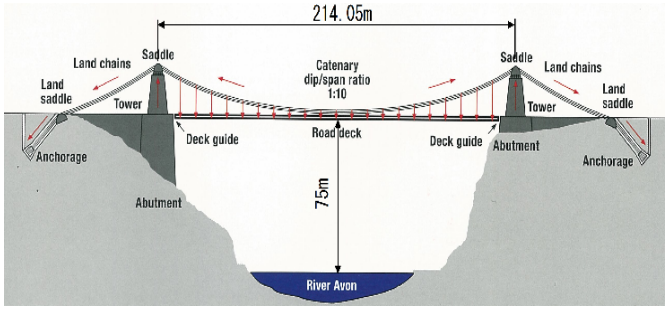
『クリフトン吊橋』

ロンドンから列車で、ブリストル・テンプルへ、さらにバスでエイヴァン渓谷へ向かう。ここから、クリフトン吊橋(Clifton Suspension Bridge)まで徒歩で十数分かかる。エイヴァン川の上流にはブリストル港があり、ここはかつて軍港であったため、軍艦のマストに制限され、橋梁の高さは、水面から 30 メートル以上とされた。このため、河口側の平地を避けて渓谷に架けられたとされる。

クリフトン吊橋全景

クリフトン吊橋は、1831 年に着工し、1864 年に竣工した。アイアンブリッジ完成から 85 年後である。橋梁の形式は、その名の通り吊橋である。主塔間距離（吊橋、斜橋橋などの長大橋では橋の規模を示す指標）は 214.05 メートル、主塔高は 26 メートル、水面からの高さは約 75 メートルという雄大な景観を誇る。

側面図



パンフレット「CLIFTON SUSPENSION BRIDGE より

因みに、奥越九頭竜湖に架かる箱ケ瀬橋は、主塔間距離が 206 メートル、でほぼ同規模の吊橋である。箱ケ瀬橋の完成は、1967 年でクリフトン吊橋の約 100 年後である。

両者の違いは、箱ケ瀬橋が湖面に架かる吊橋であるのに対して、クリフトン吊橋は、渓谷に架かるためより立体的でダイナミックな景観となることである。

箱ケ瀬橋

Googl Map より

クリフトン吊橋が建設される頃には、製造技術も発達し、鉄の性能も飛躍的に向上したものと思われる。吊橋において最も重要な部材である吊材は錬鉄が用いられている。錬鉄はアイアンブリッジに用いられた鋳鉄に比べ引張強度がはるかに高く、長スパンの橋梁が実現できたと思われる。

現在の箱ケ瀬橋や本四橋の吊橋に用いられている吊材は、高張力鋼の線材を束ねたケーブルが主流となっている。クリフトン吊橋では連鉄製の板をボルトで接続し鎖状にしたものを連ねて吊材としている。

クリフトン吊橋橋詰

このような鋼板の鎖を吊材とした橋梁は、1990 年 IRE-REF 合同海外研修で訪れたシンガーポールで見かけた。その時の橋の記憶とともに、本多先生との出会いがよみがえり、数々の思い出とともにしばし感傷に浸った。

三びきのこぶた

谷口さとみ

シャーロキアンの私がずっと行きたかったイギリスの第一印象は、子供の頃に読んだ『三びきのこぶた』です。（偶然か必然か、この話はイギリスの童謡でした。）初日に訪れたマンチェスターは特に、煙突の付いたレンガ造りの家が数多く立ち並んでいました。１６６６年のロンドン大火後、それまでは、あのセントポール寺院でさえも木造だった街並みが、都市計画によって現在のようになったそうです。

海外を訪れるおもしろさは、いまある自分の世界とは全く違う世界に触れることができるところにあると思います。ビルも橋も年代がごちゃまぜなロンドン市街地は、頭の中までごちゃまぜになりそうでした。ころころ変わる天気も、イギリスの人たちは気にする様子はありません。なぜなら、濡れても大丈夫なように撥水性のある上着を着ているからです。朝の天気予報を見て、洗濯物が外に干せるかどうか考える事などないのだろうか。とすると、どういうやり方をしているのか教えてほしいわぁと思ったのでした。

さて、今回調査した、『アイアンブリッジ』、『タワーブリッジ』のように古い建造物を間近で見ると、過去へタイムスリップしたように感じることができます。これはとても貴重な体験だなと思います。建造物が長生きしてくれているおかげです。こぶたの造ったワラや木の家を吹き飛ばしたオオカミの息は、日本の台風に置き換えて考えることができそうです。つい最近も、台風や豪雨がありました。三男こぶたのレンガ造りの家のように、災害に備えた造り方や暮らし方、都市作りを心がけ、未来の人たちにも２０１９年にタイムスリップしてもらえたらいいなと思います。

写真　テムズ川に架かる近未来的な歩行者専用橋『ミレニアム・ブリッジ』が 1666 年のロンドン大火で焼失後、再建されたセント・ポール大聖堂へと連れて行ってくれるようです。

編集後記

ＮＰＯ法人化してから２回目、ＲＥＦ通算で１９回目の海外都市調査が、英国のマンチェスター市、リバプール市、ロンドン市他を対象として実施された。調査団はＲＥＦ会員５名とその家族２名を加えた７名で構成されたが、少人数であったため班構成は行われず、各人の自主的な行動計画に基づき、意欲的に都市調査が実施された。この報告書は参加した全ての団員から提出された原稿をもとに編集されている。

報告書の編集方針はこれまでのＲＥＦ研修報告書を踏襲しているが、前例では１～２頁程度の行動記録が、本書では１０頁に及んでいる。これは、３頁に示した全体行動記録をご覧いただければ判るように、今回の研修では団員各々が事前に設定した目的地へ自由に出かけていることから、団員ごとの行動記録が資料としても有効であるとの判断から掲載したものである。

2007 年に実施された一般財団法人地域環境研究所の海外研修から１２年振りのヨーロッパであったが、近年の様々な都市開発や社会資本整備の取組みのみならず、世界遺産や産業近代化遺産といった歴史的な価値を有するものの再評価を行う貴重な機会となった。

本書が、地域・都市計画に関心のある方々にとって、有意義な資料として活用されれば幸いである。

副団長　加藤哲男

ＮＰＯＲＥＦ創立４０周年記念海外研修
英国都市調査団報告

発行年月；２０１９年１２月
発行機関；特定非営利活動法人福井地域環境研究会
発行者　；理事長　加藤哲男
同住所　；〒910-0853　福井県福井市城東３丁目９番１７号
同電話　；０７７６－２４－４４８７
ＵＲＬ　；https://www.nporef.com/